

Zirni Manuscript (ジルニー文書) をめぐって¹— 日本言語学拾遺 (5)

長田俊樹

1. はじめに

父・長田夏樹の仕事の中で、Zirni Manuscript だけが英語で出版されたものである。

『長田夏樹著作目録』²には、以下のように記されている。

The Zirni Manuscript — A Persian-Mongolian Glossary and Grammar (共著), 京都大学, 1961 年。 * 京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊の刊行成果の第 6 冊として出版。ペルシア語で書かれたアフガニスタンのモゴール族の語彙と文法を記したマニュスクリプトの解説と研究。共著者: 岩村忍、山崎忠。本人担当部分: Introduction (1-29 頁) 本人が執筆し、岩村が補正、Transcription and Translation (30-80 頁) 山崎が執筆し、本人が補正、Glossary, Index (83-160 頁) 本人が執筆し、岩村が監修。

この本の構成は以下のとおりである。

岩村忍が書いた Preface (4 頁) とポッペが書いた Preliminary remarks on the Zirni manuscript (5 頁) を除けば、Introduction (1-29 頁)、Transcription and Translation (30-80 頁)、Glossary ; Abbreviations (83-146 頁)、Appendix ; Kundur Glossary (147-150 頁)、Index (151-160 頁) からなり、それに地図、文書のファクシミリが付いている。

つまり、長田夏樹がほとんど書いたことになる。

しかし、この本の著者は Shinobu Iwamura, with the collaboration of Natsuki Osada and the late Tadashi Yamasaki となっている。あくまでも岩村忍が主たる著者であり、長田夏樹と山崎忠は共同執筆者となっている。ほとんど書いていない岩村の名前をどうしても前面に出す必要があったのなら³、岩村を編集者とし三人並置すべきだったのではないか。今なら完全に許されるわけもない。長田夏樹の息子という立場を除いても、それが正直な思いである。

また、岩村忍が 1962 年出版の『アジア歴史事典』のモゴール族の項では、次のように書いている。

¹ 草稿の段階で、以下の方々からコメントやタイポなどのご指摘をいただいた。名をあげて感謝する。高田時雄京都大学名誉教授、千田俊太郎京都大学教授、藤原敬介帝京科学大学准教授。

² 以下のインターネットサイトから閲覧。

<https://kodaimoji.chowder.jp/pdf/pdf9/chosaku.pdf>

³ 岩村の方にも事情があったことは推察できる。つまり、この学術探検隊が京都大学を前面に出して派遣された以上、その報告書はその隊員であった岩村忍の名前で出さないといけなかったという事情である。

モゴールぞく、一族、Mogol アフガニスタンに住む、トルコ系及びイラン系と混血した蒙古人。13世紀にユーラシア大陸で大発展をとげたいわゆる蒙古(モンゴル)は、もとは部族名にすぎなかった。この部族名は、東の方では Mongol といわれ、西の方ではモゴール Mogol, Moghol, モグル Mughul などと発音されてきたらしい。モゴール族は、トルキスタンのチャガタイ・ハン国のモンゴル人の系統をひくもので、中央アジアのあちらこちらに小部族として散在しているらしいが、その集団的居住地を最初に(1954)つきとめたのは、岩村忍、H. F. Schurman⁴である。しかしモゴール族とモゴール語に最初に注意がはらわれたのはかなり古く、まず 1838 年にリーチ R. Leech が報告し、ついで 1905 年にラムシュテット G. J. Ramstedt が西トルキスタンのクシュカ Kushka へ出かせぎにきた 2 人のモゴール人からモゴール語を採取している。モゴール語における画期的な業績は 55 年アフガニスタン西部のジルニ Zirni において岩村忍がその写本を発見したことで、これによってモゴール語の性質が明らかにされることが期待されている。(岩村忍 1962:55)

この文章をまとめると、次のようになろう。

モンゴル帝国、つまり元が 13 世紀にヨーロッパまで領土を拓げていったが、その末裔が中央アジアに散在していて、その「集団的居住地を最初に(1954)つきとめたのは、岩村忍、H. F. Schurman である」ことを主張している。アフガニスタンにおけるモンゴル人の発見をどうしても岩村の手柄としたいという思いが見え隠れしている。そういうと、いいすぎだろうか。「ジルニ Zirni において岩村忍がその写本を発見した」とあるが、「岩村らが」とするのが正確である。写本も自分が発見しその分析もまるで自分がやったように読めるのは筆者だけだろうか。

じつは、このジルニー文書を出版する際に、岩村忍はじめとする関係者との大量の書簡によるやり取りがあり、それを父が残していた。一つは「ゼルニ文書⁵岩村氏来信」と書かれた大きな封筒に入れられており、もう一つは「モゴール語関係」と書かれた封筒にまとめられていた。これに加えて「岩村忍氏来信」と書かれた封筒もあったが、この中にはジルニー文書と関係のない年賀状などが主に入っていた。しかし、こちらにもジルニー文書と関連する書簡が見つかった。それをまとめて小論で紹介する。書簡類はすべて翻刻し、それをまとめて付録として掲載する。

⁴ Schurmann が正しい綴りであるが、ここでは Schurman となっている。

⁵ 父は岩村忍から「ゼルニ」と聞かされていた。実際、岩村(1956:103)は「わたくしたちはこのゼルニではじめてモゴール人に会った」と記しているし、出版時の朝日新聞の記事にも「ゼルニ・マヌスクリプトを公刊」とある。しかし、探検隊の一員であった梅棹忠夫は、その著『モゴール族探検記』で「ジルニー」と呼んでいるし、上記で引用したように、『アジア歴史事典』執筆時には岩村も「ジルニ」と呼んでいるので、小論では「ジルニー」に統一しておく。

2. ジルニー文書発見まで

まず、父と岩村忍の関係について、簡単に述べておこう。

父は戦時中、張家口にあった蒙古文化研究所に勤務していた。副所長だった江実⁶が乞食をしていた父を拾って研究所に呼んだという逸話を何度か聞かされたが、その真偽はさだかではない。その蒙古文化研究所の向かいにあったのが西北文化研究所だ。この西北研究所は今西錦司所長⁷、石田英一郎副所長⁸、理系に中尾佐助⁹、梅棹忠夫¹⁰、文系に藤枝晃¹¹、甲田和衛¹²など戦後のアカデミズムで活躍した方々がいた。中国の回教徒調査のため、その西北文化研究所に東京にあった民族研究所から派遣された研究者がいた。それが岩村忍、佐口透¹³、小野忍¹⁴である。つまり、張家口で二人は初めて会ったことになる。戦後、父は引き揚げ後、1948年に神戸外事専門学校に職を見つけ、岩村忍は1946年3月戦争調査会事務局調査官¹⁵となった後、参議院の文部専門官を務め、1950年に京都大学人文研に入る。それが書簡のやり取り以前の経緯である。

⁶ 江実（1904-1989）は京大言語学科を卒業。戦後は岡山大学で教鞭を執った。アルタイ言語学を専攻し、1939年には『蒙古源流』を訳注して出版している。その人柄については、庄垣内正弘が『月刊言語』に連載した「言語学界怪人伝」に紹介されている。

⁷ 今西錦司（1902-1992）は文化勲章を受章した、説明を必要としないほど有名だが、ウィキペディアによると「日本の生態学者、文化人類学者、登山家。京都大学名誉教授、岐阜大学名誉教授。位階は従三位。日本の霊長類研究の創始者として知られる。理学博士（京都帝国大学・1939年）」とある。著作は『今西錦司全集』（講談社）にまとめられている。

⁸ 石田英一郎（1903-1968）は戦前ウィーンで民族学を学んだあと、この西北研究所に赴任。戦後は東大の文化人類学教室初代教授となった。没後、『石田英一郎全集』（筑摩書房）が出版された。

⁹ 中尾佐助（1916-1993）は、ウィキペディアによると「日本の植物学者。専門は、遺伝育種学・栽培植物学。ヒマラヤ山麓から中国西南部を経て西日本に至る「照葉樹林帯」における文化的共通性に着目した「照葉樹林文化論」を提唱した。大阪府立大学名誉教授」とある。著作は『中尾佐助著作集』（北海道大学図書刊行会）で読める。我々探検学徒は中尾から受けた影響が大きい。

¹⁰ 梅棹忠夫（1920-2010）は文化勲章を受賞した国立民族学博物館の初代館長。著作は『梅棹忠夫著作集』（中央公論社）にまとめられている。

¹¹ 藤枝晃（1911-1998）は京大東洋史卒。戦後は京大人文研に在籍し、1975年定年退官。フランス学士院よりジュリアン賞を授与された。著書は『文字の文化史』（岩波書店）が有名。なお、西北文化研究所については「西北文化研究所の思い出―藤枝晃談話記録―」『奈良史学』4:56-93（1986年）がある。

¹² 甲田和衛（1920-1993）は阪大文学部長・人間科学部長を歴任し、阪大退官後は放送大学学長を務めた。父が一番仲が良かった友人で、父が大陸で召集されたとき、日本軍から脱走したそうだが、甲田さんが手助けしてくれたそうだ。

¹³ 佐口透（1916-2006）は戦前民族研究所に所属し、戦後は金沢大学に奉職。岩村忍とは民族研究所以来の付き合いだったが、その微妙な関係が佐口透（1996）「中国ムスリム研究の回顧と展望」『内陸アジア史研究』11:1-16からうかがい知ることができる。

¹⁴ 小野忍（1906-1980）は1929年東大支那文学科を卒業後、富山房に入り百科事典の編纂にかかわり、民族研究所嘱託となって張家口にやってきた。戦後は東大教授となった。趙樹理『結婚登記 小説 他四篇』や駱賓基『北望園の春 他五篇小説』を岩波新書として刊行。

¹⁵ 『官報』1946年3月23日による。

このジルニー文書をめぐっては、その背景から説明する必要がある。

まず、岩村忍からの昭和 29 年 10 月 5 日付けのハガキがある。そこにはこうある。

拝啓 御高著抜刷大変有益に拝読しました。出歩いていましたので、御礼おくれて恐縮です。アフガニスタンで蒙古語を話すモゴール人に会いました。結果はこんどの研究所二十五
年紀要に発表のつもりです。先はお礼迄。いずれ拝眉の上。 頓首

十月四日

じつは、岩村忍はこの年アフガニスタンで調査をおこなっている。1954 年 2 月 26 日に羽田をたち、パキスタン経由でアフガニスタンに行き¹⁶、7 月末に帰国している。

上記のハガキに出てくる「モゴール人」について、その内容をもう少し詳しく紹介した一文がある。それが『東洋史研究』に掲載された「アフガニスタンのモゴール族」である。短い文章なので、以下に掲載する。

半世紀以上も前にフィンランドのラムシュテッド博士が、メルヴの南、アフガニスタン国境に近いクシュクで、アフガニスタンからきた二人の蒙古語を話す蒙古人に会って、蒙古語の語彙を採集したことはよく知られている。しかしその後このアフガニスタンの蒙古人が一体どこにいるのかということは全然わからなかった。多くの学者はヒンズークッシュ山脈西部のハザラジャート地方に住むハザラ人と蒙古語を話すモゴール人とを混同して考え、ハザラジャートに今も蒙古語が残存しているように考えていた。実は私も今度のアフガニスタン調査までは、そう考えていたのである。本誌十三の一・二号に載った田村教授宛の私信にも私は「ハザラ蒙古人」と書いた。モゴールとハザラとの混同は、無理もないのである。ハザラ人が十三世紀の蒙古遠征軍の子孫であるということは、バブル帝のメモワール以来信ぜられていることだった。

ところがこんどの旅行中、ヘラト、マイマナ、バグランの付近の三箇所でも蒙古語を保存しているモゴール族の所在（共にひどい山中）をつきとめることができたが、彼等はことごとくハザラ族とは何の関係もないと主張している。

そこで私は七月一ぱいを費して西部ヒンズー・クッシュ山脈中にハザラ族の村々を訪れて千キロ以上の旅行をした。その結果は、ハザラ族はことごとくペルシャ語を話しており、彼等もまたモゴール族との関係を全面的に否定していることを見出したのである。

もう一つの発見はこのモゴール人の居住地はゴラート地方で、五、六十年以前にその一部が移動したという事実である。ラムシュテッドが会ったのも多分この移動中のモゴール人であったのではなかろうか。

¹⁶ この旅行の様子については、岩村忍(1954c)で経過報告がなされ、この旅行の成果については『アフガニスタン紀行』(1955 年、朝日新聞) および「アサヒ写真ブック 12 アフガニスタン」(1955 年、朝日新聞)にまとめられている。

アフガニスタンのモゴール人と蒙古語については、人文科学研究所二十五年記念欧文紀要に私と同行したシュルマン博士と共同で一文を寄稿しておいた。(一九五四・八・一) (岩村忍 1954b:234)

ここに出てくる人文科学研究所の欧文紀要に掲載された論文は以下の通り。

Iwamura, Sh. (H) and H. F. Schurmann (1954), "Notes on Mongolian Groups in Afghanistan", Silver Jubilee Volume of the Zinbun-Kagaku-Kenkyusho, Kyoto University

この論文の共著者であるシュルマン博士について述べておく。

Herbert Franz Schurmann (1926 – 2010)は、子供のころから語学に長け 12 言語ができたという。徴兵されて軍隊に入り、戦後占領軍とともに日本に駐留し、日本の新聞の検閲をおこなっていた。軍を退役後に、ハーバード大学でアジア研究の博士号を取得した後、アフガニスタンに行き、そこで 20 歳以上年上の岩村とフィールド調査をおこなった。その成果をまとめたのが Schurmann (1962) *The Mongols of Afghanistan: An Ethnography of the Moghòls and Related Peoples of Afghanistan* である。その後カリフォルニア大学バークレー校の社会学歴史学科に 38 年間勤務し、ヴェトナム戦争に反対し、北ベトナムを訪問し税金を納めない運動を展開した。中国の専門家となり、中国研究センターの所長も務める一方、1969 年にパシフィック・ニュース・サービスを設立しジャーナリスティックな活動もおこなった。

岩村忍とシュルマンとの関係については、岩村自身がこう説明している。

ここで同行のシュルマン君について一言しておかなければならない。シュルマン君はアメリカのハーバード大学で博士号をとった後、フォード財団の奨学金を得てトルコに留学し、さらに日本を訪れ、昭和二八年の夏から翌年一月末まで私が勤務している京都大学人文科学研究所の研修員として中国経済史、特に蒙古時代を研究していたアメリカの少壮東洋学者である。私のアフガニスタン旅行計画を知った同君は、いっしょにアフガニスタンまで行きたいというので、同行することになったシュルマン君は私より二週間ほど前に日本を出発して香港に寄り、我々ふたりは三月初めカラチで落合ったのである。それから殆んど半年後、八月にカラチで別れるまで、終始行をともにしたわけである。(岩村 1955:6-7)

以上、1954 年の岩村とシュルマンのアフガニスタン調査行の概要である。

このアフガニスタンのモゴール人調査は、翌年も行われる。それが戦後初の文部省助成による海外学術調査である、京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術調査隊だ。そこでジルニー文書が発見されることになる。

木原均京都大学理学部教授を隊長とするこの学術調査隊の隊員は、日本映画新社監修

(1956)『カラコルム：カラコルム・ヒンズークシ探検の記録 中央アジア探検記録』（平凡出版）によると、以下の通り。

ヒンズークシ隊

北村四郎京大理学部教授〈植物班〉

山下孝介京大農学部教授〈植物班〉

岩村忍京大人文研教授〈人類班長〉

山崎忠京大文学部講師〈人類班〉

梅棹忠夫京大人文研講師〈人類班〉

岡崎敬京大人文研助手〈人類班〉

奈良弘美（朝日新聞記者）

中村誠二（日本映画新社）

カラコルム隊

今西錦司京大人文研講師〈カラコルム支隊長〉

松下進京大理学部教授〈地質班長〉

藤田和夫京大理学部講師〈地質班〉

中尾佐助京大農学部講師〈植物班〉

原田直彦京大医学部講師

林田重男（日本映画新社）

隊員の所属はすべて京都大学になっている。それは京都大学学術探検隊だからであろう。本務校についていえば、梅棹忠夫は大阪市立大学助教授だったし、山崎忠（詳細は後述）は天理大学教授だった。これら隊員のうち、モゴール調査に関係したのは、人類班の岩村、山崎、梅棹、岡崎¹⁷の四名と朝日新聞記者の奈良と記録映画を担当した日本映画新社の中村である。

じつは、この調査隊について、上であげた日本映画新社監修(1956)以外にも、出版された本がある。一つが梅棹忠夫(1956)『モゴール族探検記』（岩波新書）であり、もう一つが木原均編(1956)『砂漠と氷河の探検』（朝日新聞）である。後者には岩村忍が「モゴール族をたずねて」を執筆している。この学術探検隊がいかに苦勞してジルニーにたどり着き、ジルニー文書を発見したのか。その詳細はこれらの本を参照していただき、ここでは繰り返さない。ここでは言語学班として活躍し、ジルニー文書の共著者にあがっている山崎忠について一言述べておく。

¹⁷ 岡崎敬（1923-1990）は京都大学東洋史学科を卒業後、京大人文研助手から名古屋大学助教授を経て、1960年九州大学に転任、1987年九州大学名誉教授となる。インターネットサイトの『九州大学の研究者たち』によると、「東アジア考古学者として、中国考古学からシルクロードの東西交渉まで、広大な領域にわたる数多くの業績をあげた」とある。

山崎忠(1916-1956)は天理外国語学校の支那語部を卒業後、蒙古連合自治政府に勤め、戦後は天理図書館、天理大学に勤務し、京大にも出講していて、この学術探検隊に参加した。梅棹(1956)には「山崎さん」として登場し、ジルニーでモゴール語を話す人が見つかったときの山崎忠の喜ぶ姿が生き生きと描かれている。ジルニーでは、ペルシア=アラビア文字¹⁸で書かれたジルニー文書を発見し、山崎はその翻訳出版を担当していた。しかし、アフガニスタンからイランに入り、イランのテヘランにとどまって研究を続けている際、ジルニー文書の解読翻訳を成し遂げることなく、1956年4月、滞在先のテヘランにて客死した¹⁹。

山崎忠が亡くなったため、ジルニー文書の解読を担当する人がいなくなってしまった。そこで、その代わりに名前があがったのが長田夏樹であった。なぜ父の名前があがったのか。関係者がすべて死んでしまった今となつてはその理由がわからない。ただ、ペルシア=アラビア文字が読めて、モンゴル語の知識を持った人となると当然限られてくる。

以上、ジルニー文書の発見から長田夏樹が担当するに至った経緯をみてきた。

3. 長田夏樹宛岩村忍書簡及びモゴール語関連書簡

父の死後、見つかった岩村忍の書簡のうち、ジルニー文書にかかわるものは以下の通り。

1954年－1通

1956年－7通

1957年－12通

1958年－15通

1959年－4通

1960年－14通

1961年－15通

また、モゴール語関連書簡については以下の通り。

1958年－安部健夫²⁰ 1通

1959年－安部健夫 1通、

梅棹忠夫 2通、

¹⁸ ペルシア文字とアラビア文字は厳密に言えば若干ことなる。また、ペルシア語は印欧語族なのに対し、アラビア語はアフロ・アジア語族に属す。Homam(1972:562)によると、ジルニー文書はアラビア文字で書かれているという。なお、小論ではインド言語学でよく使用される、ペルシア=アラビア(Perso-Arabic)文字と呼んでおく。

¹⁹ 父から聞くとところによると、ミナレットの上から飛び降り自殺したらしい。山崎忠については別稿でまとめる予定である。

²⁰ 安部健夫(1903-1959)は京大農学部に入學後、文学部に入りなおし東洋史専攻を1928年卒業。三高教授を経て、1940年京大助教授。戦後は人文研所長を務める。専攻は元清史。「安部健夫博士略歴・著作目録」『東洋史研究』1959, 18(3): 455-457を参照した。

藤原茂男²¹ 2通、
北村四郎²² 1通、
藤枝晃 8通、
貝塚茂樹²³ 2通
1960年—藤枝晃 2通

後述するように、岩村忍がインドなどに行って京都を留守にしていた1958年から1960年にかけて、モゴール語関連書簡が送られている。このうち、梅棹忠夫と藤枝晃は第二次世界大戦のさなか、二人が西北文化研究所に勤務していた頃、父がいた蒙古文化研究所が近くにあったため、戦中から面識があった。

書簡全てについて、付録1. に「岩村忍書簡」、付録2. に「モゴール関連書簡」を掲載しておいたので、それを参照しながらみていこう。

1954年の書簡はすでに引用したように、岩村忍がシュルマン博士とおこなった第1回のアフガン調査の後に送られている。

1955年は京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊が派遣された年である。木原編(1956)の巻末には学術探検隊の日程が載っている。それによると、岩村忍が日本を出たのが4月4日で帰国は8月末、山崎忠と梅棹忠夫がジルニー村などでモゴール語調査をやったのが8月から10月末、その後山崎はテヘランに入ってモゴール語の研究をおこない、梅棹はパキスタンからインドを横断し、11月11日に帰国している。したがって、1955年には何の書簡もない。

ところが、1956年4月、モゴール語調査を担当していた山崎忠がテヘランで客死する。その後、7月14日付の書簡で「あの写真は不完全です。今、完全なのをつくっています。山崎君の遺稿も整理できました」とあり、続いて8月22日付書簡で「モゴル文献ゼルニ文書写真一揃別便にて送りました」とあるので、山崎忠が亡くなって4か月ほどで、父が引き継ぐことになったのだと思われる。

翌1957年では、「臨川書店から買ったスタインガスの辞典²⁴を御出の時、御持参下さい」

²¹ 藤原茂男は当時の京大人文研の事務担当だと思われる。

²² 北村四郎(1906-2002)は1931年京大理学部卒業。理学部助手、助教授を経て、1945年からは京大教授。1955年の学術隊の一員としてアフガニスタンの植物を研究。

²³ 貝塚茂樹(1904-1987)は文化勲章を受章した歴史家である。この当時、京大人文研の所長を務めていた。

²⁴ 「スタインガスの辞典」とはSteingass, Francis Joseph (1892) *A Comprehensive Persian-English dictionary, including the Arabic words and phrases to be met with in Persian literature*. London のことである。昔はなかなか手に入らなかったが、Internet Archive のサイトからPDFをダウンロードできるし、シカゴ大学のサイトで検索もできる。<https://dsal.uchicago.edu/dictionaries/steingass/> なお、父の死後、蔵書を整理していたら、人文研の蔵書印が押されているスタインガスの辞書が見つかった。その返還手続きを取ることにした。

(3月7日付)や「レゲテ²⁵の欠頁つくらせておきます」(5月30日付)とか、「トルコマン字引²⁶の件、研究費が到着次第処理します」(6月21日付)とか、「チャガタイ語の字引²⁷、京大にありません。どこかにあったら借りて下されば、写真は直ぐとります。その他、必要な本は買って、写真をとってもよいので、お知らせください」(12月11日付)など、父がジルニー文書研究に必要なものを、岩村の研究費で買ったり、写真製本したりしていることがわかる。

1958年に入っても、「大兄御要求の本は京大にはないようですが、そちらで本だけ都合できませんか。写真は直ぐこちらでとれますが、ポッペ²⁸のパスパ文字考とコータン字典は注文しました」(1月9日付)と関連図書の購入が続いている。ただ、この年からは具体的な原稿の話もあり、「transcriptionの清書は当方で一部作成中です。未完の部分なるべく早く御作成下さいませんか。transliterationの進捗は如何ですか」(6月21日付)といった文言もみられる。

ところが、原稿の完成もないまま、1958年9月に、岩村忍はインドに出かけてしまう。9月12日付の印刷された挨拶状に「こんどデリー大学の Indian School of International Studies, Sapru House, Barakhamba Road, New Delhi-1, Indiaの客員教授及びフォード財団研究員としてインド及び近東地方に当分の間、旅行、滞在することになり、九月下旬羽田を出発いたします」とある。そして、再び日本に帰国したのはなんと1960年7月だった。そのほぼ二年間、ジルニー文書の翻訳については長田夏樹に丸投げし、出版事務については安部健夫に委ねられることになったのである。

その経緯については、1958年12月15日付のインドからの手紙に以下のように書かれている。

拝啓 その後如何ですか。十二月というのはここでは日中は汗をかくぐらいです。十一月にはパキスタン、アフガニスタンに行ってきました。明年は四月中旬から八月中旬まで再び

²⁵ 「レゲテ」とあるが、以下の論文を指すものと思われる。

Ligeti, Louis (1955) О монгольских и тюркских языках и диалектах Афганистана (O mongol'skikh i tjurkskikh jazikakh i dialektakh Afganistana), *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* Vol. 4, No. 1/3: 93-117. 及び Ligeti, Louis (1955) Le lexique moghol de R Leech, *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* Vol. 4, No. 1/3: 119-157 の両方か、どちらかで欠頁があったのだと思われる。

²⁶ 「トルコマン字引」とあるが、N.A. Baskakov and M.Ia.Khamzaev, *Russko-turkmenskii slovar.*, Moscow 1956 を指すものと思われる。実際、父の遺品の中から、この本が見つかったのでまちがいなさう。

²⁷ 「チャガタイ語の字引」とあるが、以下か。Kunos I. *Chagataj-Osmanisches Woerterbuch* 1902 ただし、こちらは父の蔵書から発見できていない。

²⁸ Nicholas Poppe (1897-1991) はロシアの世界的なアルタイ学者で、戦後はアメリカに移住し、ワシントン大学で教鞭を執った。ここに出てくる「パスパ文字考」とは Nicholas Poppe (1957) *The Mongolian monuments in ḥP'ags-pa script. Second edition translated and edited by John R. Krueger* のことか。

アフガン、イランで暮らすつもりです。

原稿の英訳できたので研究所の安部さん宛に送りました。写真、その他の原稿も一切安部さんのところにあります。印刷についても安部さんに御世話を頼んであります。安部さんから連絡ありましたら、原稿を取りに相談に一度京都に行ってください。そうすれば出版費用の件もわかると思います。翻訳のため原稿を熟読しましたが大変立派と思います。出版されたら世界のモンゴリストは大喜びでしょう。訳文はよく見て誤訳を正して下さい。私はあとは校正を見るだけでよいかと思います。語彙の方はどうですか。完成しましたか。その後の様子お知らせ下さい。

英訳原稿などをすべて安部健夫のところに送り、安部からの連絡を待って京都に原稿を取りに行くように述べ「翻訳のため原稿を熟読しましたが大変立派と思います。出版されたら世界のモンゴリストは大喜びでしょう」と父の原稿をほめている。この時点で、岩村自身は「校正を見るだけでよい」と判断している。随分と楽観的だ。

この岩村の書簡の後、12月24日付で安部健夫が「昨二十二日在インド岩村氏よりモゴール語の原稿エアメールで届きました。お手渡しかたがた出版の件についてご相談いたしたいと思いますので、御多用中恐縮ながら当地までお出で願えれば幸甚です」と速達が届いている。安部は1959年2月16日付の手紙には「御依頼中の Glossary, Index, 新しい見積もり書をとる必要上、出来るだけ早急に完成していただきたいと存じます。お急しいところを大変恐縮ですが、事態が事態ですので宜しく御願ひ申し上げます。三月上旬まではいかがでしょうか」と、手紙からはかなり切羽詰まった状況がうかがえる。

ところが、この手紙を書いた4日後、2月20日安部健夫は突然亡くなってしまふ。これには父も大変驚いたにちがいない。梅棹忠夫は安部健夫が突然亡くなったことを告げ、「アトドウ ユウ コトニ スルカ、マダ ナンニモ キマッテオリマセン」(2月27日付)とハガキで伝えている。

一方、インドに滞在中の岩村は「安部さんがなくなられたので、出版の件は今後平岡武夫²⁹さんに依頼しますから、大兄も一度平岡さんと研究所の事務長を訪問してお打合せして」(2月27日付)と書いている。しかし、平岡武夫とのやり取りは少なくとも父の手元に残されていない。誰がこのジルニー文書出版を引き受けるか、決定までに時間がかかったようだ。

そうした事態を憂えたのか、同じ学術探検隊のメンバーだった北村四郎から「本年度は岩村さんの論文と私の論文³⁰が出版されることになっており、この出版費は六月に文部省で承認されました」(7月25日付)との封書が届き、「私は岩村の指示にもとずき貴殿に一切を御願ひしてなんとかして本年度中に出版したいものと存じます」と催促されるにいたった。

²⁹ 平岡武夫(1909-1995)は京大卒業後、戦前は東方文化研究所(人文研の前身)に勤務、戦後も人文科学研究所の教授を務めた。著作については、「平岡武夫著作目録」『東方学報』(46), 357-359, (1974)を参照。

³⁰ これは北村四郎(1960) *Flora of Afghanistan*, Committee of the Kyoto University Scientific Expedition to the Karakoram and Hindukush, Kyoto University を指す。

そこで、父は昔からの知己である藤枝晃に手紙を出したのであろう。藤枝からの「貴信拝見しました。尊稿を原稿の状態のうちに拝読することは大変光栄です」(8月5日付)とあり、ここで藤枝晃が人文研での窓口となったことがわかる。ところが、藤枝のハガキには「尊稿が事務室の金庫の中にあることを知りましたので、昨日ざっと拝見しました」(8月23日付)とあり、なんと岩村忍がインドから安部健夫宛に送った原稿は、安部の死去もあって、1958年12月から1959年8月まで、人文研の金庫に眠っていたことになる。こんな状況ではとても出版はおぼつかない。結局、岩村の帰国まで、出版にはいたらなかった。出版社すら決まっておらず、父への京大人文研からの出金をめぐって、その当時の貝塚茂樹人文研所長をまきこむことになる。

岩村忍は1960年7月に帰国し、「その後お変わりありませんか。数日前に帰りました。原稿の件でなるべく早くお目にかかりたいので、御都合つき次第、御面倒でも一度御上洛願えませんか」(7月13日付)と速達が届き、ようやく出版にむけて動きだす。「校正近日中に出ますから早速お送りします」(10月30日付)と初校が11月に出たものと推察できる。また、「これで初校すみしました」(12月15日付)とあるので、初校以降は順調に進んでいき、「ポッペさんへは昨日写真と校正を送り、至急序文書いてくれるよう手紙を出しました」(3月18日付)とあるので、3月には再校も終わったのであろう。

ところが、大きな問題が起こる。それは以下の手紙に書かれている。

実はゼルニ・テキストの件、前年度(一昨年)から引き続き内外印刷にやらしているので、内外から前渡金支拂の要求があったので、研究所事務局の責任で一部今年始めに支拂いました。それで若し会計検査(四、五月ころ)までに出版されていないと、事務長と会計係長の進退にまで影響するので(昭和三五年にも予算を使えなかったことで既に責任になっています)小生も気をもんでいます。小生自身のことなら、何の心配もしていないのですが、累が何も知らぬ事務局にまで及んでは申しわけがありません。(2月27日付)

1959年度の予算で出版できず、1960年度までに出版できないとなると、事務長の進退問題となると、京大人文研として大きな問題となっていたのである。さらに、これをめぐって以下のような状況が生じてしまった。

昨日午後、文部省から大学本部経理部に電話がかかりました。それによると会計検査院の講評で京大の公費支出に手続上不適当なものがある旨指摘され、その中にはゼルニ・テキスト出版が含まれていたそうで、大学本部でも狼狽し、研究所事務室が叱られました。それだけならよいのですが、検査院と文部省に誠意(?)を示すために印刷所を督励し、今月十九日に検査院と文部省との連絡会議までに一部だけでも製本して文部省に届けよという指令がありました。右は事務関係のことで我々には何でもないので、小生としても本部が責任を問われるのをほっておくわけにはゆきません。右の状況につき、いままでお送りした校正

を月曜までに必ずお願いします。最後の校正は京都に来てやってもらいたいと思います。(6月9日)

この事態をどう乗り越えたのか。書簡類からはわからない。

ただ、ジルニー文書の出版を伝える朝日新聞の記事がある。以下に引用する。

ゼルニ・マヌスクリプトを公刊

京大カラコルム・ヒンズークシ探検隊が、1955年アフガニスタンで発見した蒙古語とペルシャ語の対訳単語集・文法書の研究が「ゼルニ・マヌスクリプト」(B5版、英文で約二百ページ)と題し、京大岩村忍と天理大山崎忠・神戸外大長田夏樹助教授の協力でまとめられこのほど公刊された。この本はこれまでに発見あるいは出版された蒙古語関係の文法書としては最古のもの。蒙古語はアラビア文字で書かれているが、単語集としても語数約千を収めれば多く、蒙古語の世界的権威であるコロンビア大学のポッペ教授も序文で「最近における最大の発見」と激賞している。

まず原文(中期蒙古語)を発音記号で書いて、それを英文に翻訳し、現在使われている蒙古語および方言と一々対照して解説が加えられてある。このため印刷・校閲に非常に手間どり、発見以来実に六年振りで公刊の運びになったもの。その間山崎教授はテヘランで亡くなるという貴い犠牲も払われている。(1961年7月16日付)

以上、1956年4月、山崎忠の死去の後、長田夏樹が急遽担当することになったジルニー文書は、5年の歳月をかけてようやく上梓されたのである。

4. 岩村忍について

岩村忍について、小論でまとめておきたい。

ここまで小論を読んだ方々は、岩村忍がすごく悪い人のように思うかもしれない。しかし、父は不思議と岩村忍の悪口をいったことがない。それはなぜなのか。小論をまとめるまではまったくわからなかった。一つには、研究用として、その当時ではかなり高価で珍本を岩村の研究費で買ってもらったという思いからではないかとも考えた。しかし、それだけではどうも腑に落ちない。

ところが、岩村の書いたものを読んでみると、岩村自身は書齋にこもっていつも机に向かう学者であることを目指してはいなかったし、ディレタントで結構といった態度がしばしば見受けられ、学者と考えると腹が立つが、新聞記者が気の向くままに研究のまねごとをしてきたのだと思うと、腹も立たないのではないかと、思うようになった。そこで、岩村の文章を引用しつつ、岩村について考察してみよう。

(1) 岩村忍が研究者になるまで

岩村忍の大学などについて、民族研究所時代の同僚であった佐口透がかなり詳しく述べて

いる³¹。少し長くなるが、以下に引用しておこう。

岩村忍は日本での東洋史出身ではなく、アメリカ帰りで、当時、外務省関係の仕事をされ、元史・モンゴル史の研究者であるというのが当初の知識であった。あとで知ったことだが、岩村は小樽市生まれ、小樽高商を卒業後、カナダのオタワ大学（別の情報ではアメリカ、カンザス州のオトワ大学とも伝えられる）を経て、カナダのトロント大学大学院で社会学、経済学、近世史を学んだ（本人著書奥付けの著者紹介記事による）といわれる。大学院修了後、岩村は新聞連合（現共同通信社）のロンドン支局長、特派員となり、1932年のLyttton調査団に随行したジャーナリストであったことを知った。・・・(中略)・・・1942年ころより1945年8月の終戦時に至る約3年間、私は岩村忍に私淑し、私の友人、先輩、上司の立場で接し、とくにジャーナリスト、アメリカ風の自由な発想と鋭敏の感覚を持つ岩村から私は多くのものを学んだ。かれはいつもパイプ煙草を燻ゆらし、冷静謹直で、やや神経質なところもあり、当時の年齢のわりには老成していたように見え、しかもバタ臭いところは全く感じられなかった。また、かれは私にはLyttton調査団のことはおくびにも出さなかったし、その英語力をひけらかすこともなかった。（佐口 1996:3）

この佐口の回想がすべてを物語っている。日本で漢籍を読む訓練することなく、元史・モンゴル史の研究者になったことがわかる。そのためか、岩村忍(1939)『十三世紀東西交渉史序説』に序文を寄せた白鳥庫吉に「惜しむらくは、支那側史籍の駆使が少し足りなかつたやうに思はれなくもない」（白鳥 1939:6）と苦言を呈している。また、大学がカナダのオタワ大学なのか、アメリカのオトワ大学なのか³²。はっきりさせなくとも、何の問題もなかったのだろうか。いまやコンプライアンスが大事なので、不問にされたことが不思議である。これも細かいことは気にせず、何ごとにもおおらかだった時代ということなのか。

（2）過去の業績を抹殺

1970年、岩村忍が京大を退官するとき、「岩村忍教授著作目録」が『東方学報』に掲載された。それをみると、1938年以降のものしか掲載されていない。以下に、著作目録に登場しない業績を上げておこう。

1. 信用機関の社会化 C.H.ダグラス 著、岩村忍 訳. 中央公論社, 1929
2. 金融の合理化 C.H.ダグラス 著、岩村忍 訳. 我観社, 1929
3. 我観 (68);7月號 雑誌, 1929-07 国際カルテルと保護關稅/岩村忍 / 114~117

³¹ 佐口透(1996)「中国ムスリム研究の回顧と展望—民族研究所とその遺産—」『内陸アジア史研究』11:1-16

³² 『マルコ・ポーロ』（岩波新書）の奥付けには「アメリカのオトワ大学卒業」とある。一方、『シルクロード』（NHK ブックス）の奥付けには「カナダ・オタワ大学卒」とある。

4. 我觀 (71);10月特輯號 雑誌 1929-10 生産力増加の技術的原因/岩村忍 / 122～129
5. 我觀 (73);12月號 雑誌, 1929-12 經濟問題解決への工學的方法の應用/C・H・ダグラス ; 岩村忍 譯 / 96～103
6. 我觀 (74);新年號 雑誌, 1930-1 近代産業に於ける組織力の考察/岩村忍 / 127～131
7. 我觀(77);3月号 雑誌, 1930-3 ブックレビュー:カーヴァーの『現代米国に於ける經濟革命』/岩村忍/220～221
8. 我觀(77);4月号 雑誌, 1930-4 輓近歐米諸經濟學說解説/岩村忍、赤羽豊二郎編
9. 金融信用論 ダグラス著岩村忍譯 春陽堂 1930.8 ダグラス派經濟學全集 1
10. ダグラス・セオリー ダグラス著岩村忍訳 春陽堂 1930.11 ダグラス派經濟學全集 4
11. 我觀(88);3月号 雑誌, 1931-03 アメリカ恐怖とアメリカ經濟學/岩村忍/ 42～44
12. 國際知識 12(5);5月號 雑誌, 1932-05-01 支那司法權の權威に関する一問題/岩村忍 / 66～69
13. 雑誌 タイムス出版社國際パンフレット通信部 [編]. タイムス出版社, 1932-07 新聞聯合社特派員聯盟調査團に隨行して / 岩村忍 / p1～29 (0004.jp2)
14. 世界知識 6月号 1935-6 動揺する英国政治の裏面/岩村忍/
15. 我觀 13(9);8月號 雑誌, 1935-08 退職積立金制度の社會的意義/岩村忍/ 61～69
16. 支那言語學概論 カールグレン 著, 岩村忍, 魚返善雄 訳. 文求堂書店, 1937
17. 中央亞細亞探検記 (富山房百科文庫) スウェン・ヘディン 著, 岩村忍 訳. 富山房, 1938

以上、国会図書館デジタルコレクションの検索による、1938年以前の岩村忍の業績である。

まず、「クリフォード・ヒュー・ダグラス少佐 (Major Clifford Hugh Douglas、MIMEchE、MIEE、1879年1月20日 - 1952年9月29日) は、イギリスの技術者、經濟學者、社会信用經濟改革運動の先驅者であった」³³が、その翻訳紹介者としての岩村がいる。また、雑誌『我觀』とはコトバンクによると「1923年(大正12)10月創刊された時論雑誌、総合雑誌。《日本及日本人》を主宰していた三宅雪嶺が、関東大震災を機に政教社と分かれて、女婿の中野正剛とともに発行」したもので、その雑誌に投稿した論考はすべて著作目録から消えている。しかし、カールグレンやヘディンの翻訳が消えているのはなぜなのか。その理由はわからない。

また、戦時中の以下の論考も著作目録に登場しない。

18. 思想 (11)(234) 1941-11 民族政策についての若干の原理的考察 / 岩村忍/p9～17
19. 日本語 1(8) 1941-12 支那文化の紹介文獻(一) / 岩村忍 / p44～48
20. 日本語 2(1) 1942-01 支那のキリスト教に関する文獻(二) / 岩村忍 / p46～48
21. 學鐙 46(1) 學鐙編集室編. 丸善出版, 1942-01 渾脱 / 岩村忍/6～9
22. 日本語 2(2) 1942-02 支那のキリスト教に関する文獻(三) / 岩村忍 / p25～29

³³ 以下のサイトから引用。 <https://academic-accelerator.com/encyclopedia/jp/c-h-douglas>

23. 日本語 2(3) 1942-03 支那のキリスト教に関する文献(四) / 岩村忍 / p52~56
24. 日本語 2(7) 1942-07 支那のキリスト教に関する文献(三) / 岩村忍 / p74~79
25. 日本語 2(8) 1942-08 支那のキリスト教に関する文献(五) / 岩村忍 / p80~84
26. 日本語 2(9) 日本語教育振興会 近刊の支那関係書(一) / 岩村忍 / p96~101
27. 日本語 2(10) 1942-10 近刊の支那関係書(二) / 岩村忍 / p102~107
28. 日本語 2(12) 1942-12 支那関係書解題 / 岩村忍 / p93~98

以上、ざっとみただけでも 28 本の論文などが「岩村忍教授著作目録」から削除されている。いろいろと詮索することはやめて、ここではその事実だけを指摘しておく。

(3) ディレッタント

岩村が自分をディレッタントと呼んだことがある。それを以下に引用する。

ヨーロッパでは国際性を有する位の研究の発表は、大体国際性を持つてゐる言葉でなされるので、学術書に使用される言葉はそう沢山あるわけでもない。尤も時には非常に立派な研究が、余り国際性のない言葉で発表される例もあるが、幸ひそのやうな場合には国際性を持った言葉で翻訳されるのがヨーロッパでは普通なので、大した不自由はないし、若しそのやうな翻訳がない時には、残念ながら読まないだけのことである。尤もこのやうな *easy-going* な態度を専門学者がとるならば、それは非難に値するかも知れないが、私のやうな *dilettant* の場合に於ては別に恥と云ふわけでもあるまい、と私かに自ら慰めてゐる次第である。(岩村 1941b:455)

この文章は戦前のものだが、京大人文研に入った後も、自分は専門学者ではないという思いがずっとあったのではないか。「このやうな *easy-going* な態度を専門学者がとるならば、それは非難に値するかも知れない」と専門学者ならば非難されるということを十分に理解したうえて、「私のやうな *dilettant* の場合に於ては別に恥と云ふわけでもあるまい」とは居直りともとられかねない自己肯定だ。恥かどうかという問題ではないと思うのだが、いかがだろうか。

easy-going かどうかはともかくとして、岩村忍はあらゆる文献を渉獵して研究するタイプでは決してなかった。それは次のような言葉からもうかがえる。

ハワースはその『蒙古史』の中で次の如く云つてゐる。「蒙古人の歴史を例としてとつてみよう・・・同時に一人で中国語、ペルシャ語、アルメニヤ語、ロシヤ語、ドイツ語、フランス語、ラテン語の造詣ある学者であることはそれ自身不可能のことである。これらの言語のいくつかはその熟達に一生涯を必要とし、しかしてこの仕事の他の部分、即ち史実の比較及び選択の時間が残されないほど困難にして複雑である。」全くハワースの云ふ通りである。(岩

村 1948 : 1-2)

モンゴル史をこころざす人は、中国語はもちろんのこと、ロシア語、ドイツ語、フランス語を読めるように努力するのが当然である。それが岩村の時代では常識だった。ところが、岩村はこのハワースの言葉をそのまま肯定し、すべての関連言語を学ぼうとしない姿勢は、まさにディレタントそのものである。とくに、岩村は博士論文(岩村 1968)においても、ロシア語論文を原文で読んでおらず、ロシア文献については訳書を引用するだけである。ここで思い出すのは、われらが石濱純太郎の指摘である。「満蒙言語の研究に充分に這入らうと思ふ人はロシア語を先づ習得して置く必要がある」(石濱 1934:6)と述べているが、岩村にはこんな言葉は耳に入らないのだろう。

一方、岩村には欧米の言語を使ってモンゴル史に挑む態度を肯定するような発言もある。それが『支那関係欧米名著解題』の序に書かれている。

専門家は勿論支那自身の資料を第一とすべきであるだらうが、徒らに *Urkunden* ばかりを弄して西洋人の研究などは齒牙にもかけないやうなことを云つてゐても、時には新説を出したつもりで実は夙に西洋人が述べてゐた説であることに気が付かないやうなことがないとも限らない。日本に於ける支那研究の業績に疎い西洋の支那学者の中には、日本人が研究の *priority* を持つてゐるにもかかはらず、それに気が付かない者が往々にしてある事實は以て他山の石とするに足るものではなからうか。とにかく西洋の支那研究には浅陋嗤ふべきものも存在するであらうが、他方仲々傾聴すべき意見や発明も少なくないことは、之を認めざるを得ないやうに考へられるのである。(岩村 1940:1)

中国を研究する専門家は漢籍と格闘するだけでなく、欧米文献にも目をやるべきだと岩村は述べている。つまり、ここに岩村の存在理由がある。『十三世紀東西交渉史序説』(1939)にしても、『蒙古の欧洲遠征』(1941a)にしても、欧米文献を駆使している。欧米文献の知識さえあれば、専門家としてやっていけると踏んだのかもしれない。しかし、この欧米文献には残念ながらロシア語の本は含まれてはいない。ロシア語を決してやらなかったのは、ディレタントで結構という居直りがあつたのではないか。筆者にはそうとしか思えない。

(4) 翻訳姿勢

岩村がヘディンの翻訳をして『中央アジア探検記』を最初に出したのは 1938 年である。それが「岩村忍教授著作目録」に掲載されていないことはすでに述べた。戦後になって、このヘディンの翻訳が筑摩書房の現代世界ノンフィクション全集に収録されている。そして、現代世界ノンフィクション全集に掲載された『中央アジア探検記』の解題を岩村は書いている。そこで、岩村は翻訳についての持論を展開している。

私のこの訳書は、実は、翻訳とか抄訳とかいうようなものではない。このような読みものたぐいの翻訳は、そのまま訳する必要はない、訳者が理解したとおりを、訳者自身の言葉で語ればよい、と私は考えている。「忠実な翻訳」に名をかりて読むにたえないような悪文の訳書が氾濫していることに反発もあったが、「即興詩人」のような翻訳ぐらいいはやってみたいものだ、と私は思っていた。この考えを実行したのがこの「中央アジア探検記」になったのである。その意味では、ピサの獄中で、マルコ・ポーロの旅行談を聞いて、ルスティケロの書きあげた「東方見聞録」みたいなものといってよい。(岩村 1966:529-530)

筆者自身も翻訳をしたことがある。その時にいつも心掛けているのが、原文をいかに忠実に訳すかということだ。ところが、岩村はそう考えず、翻訳本は翻訳者の創作であっていいのだといわんばかりである。実際、1951年に出版された『砂漠の探検』(筑摩書房)は岩村忍の名前で出されている。ところが「読者のために」とあとがきに代わる一文を寄せていて、そこには「この本は、ヘディンが・・・(中略)・・・遭難し、からくも一命をとりとめた時の貴重な記録の中から、読者のみなさんに興味のある部分を、わかりやすく書きなおしたものである」(岩村 1951b:182)とある。ヘディンの翻訳とは言わず、あくまでも岩村の名前で本を出しているのである。

このことは岩村忍『元朝秘史』(中公新書)においても同様である。そのあとがきで、「本書は単なる翻訳ではなく『わたくしの元朝秘史』だということである」(岩村 1963:203)とあり、元朝秘史の原文と格闘した成果を新書という形でわかりやすく解説する本ではない。つまり、これまでの那珂通世『成吉思汗実録』などを読みやすくしただけで、岩村が原文を読んだかどうかについては、まったく触れられていない。したがって、原文と格闘した元朝秘史研究者は岩村の本への言及はしない³⁴。岩村のプライオリティは研究に打ち込んだ成果を披露するのではなく、いかに読みやすく読者に提供するかに置かれている³⁵。

この岩村の翻訳に対する姿勢が『マルコ・ポーロ』(岩波新書)の剽窃問題とかかわってくるのであろう。

(5) 剽窃

1995年2月、朝日新聞の書評欄に、ヘンリー・ハート、幸田礼雅訳(1994)『ヴェネツィアの冒険家：マルコ・ポーロ伝』(新評論)の書評がでた。執筆者はノンフィクション作家の沢木耕太郎である。それを少し長い以下に引用する。

³⁴ たとえば、小沢重男(1994)『元朝秘史』(岩波新書) 小沢重男(1997)『元朝秘史 上・下』(岩波文庫)には岩村忍への言及は一切ない。

³⁵ 岩村忍の翻訳論にもとづいて、子供向けにも本を書いている。上で言及した『砂漠の探検』も中学生向けだし、岩村(1950)『日本人はどれだけの事をしてきたか』は(日本少国民文庫)の1冊として刊行された子供向けである。岩村には問題点が多いが、子供向けに本を書いたことは評価されるべき点ではないか。

これは二重に不運な本である。

マルコ・ポーロの『東方見聞録』は、その名高さと裏腹に、予備知識なしに読み通すには不思議と難しい本である。それはマルコが、「私」を語ることの少ない人だったこと無関係ではない。読者は、この稀代の大旅行家に、感情を移入して読むという道を閉ざされているのだ。しかし、ヘンリー・H・ハートは、この『ヴェネツィアの冒険家』で、同時代の資料や証言を巧みに引用し、『東方見聞録』に表れたマルコ以上にマルコを描いていく。筆の運びは、マルコの大旅行にも似てゆったりと急がず、「幸運であり、不幸だった」マルコの一生を色鮮やかに描いていく。

だが、この優れた作品も、日本で翻訳されるまでに四半世紀という時間が必要だった。もちろん、そうした異国の書物は無数にあるだろう。ハートの本が真に不運なのは、それだけ多くの美質を持った本であるにもかかわらず、日本の読者にはまったく新鮮に受け取れないことなのだ。なぜなら、長く日本のマルコ・ポーロ研究の基本書とされてきた、岩村忍の『マルコ・ポーロ』(岩波新書)とよく似ているからだ。私も、途中で何度「これは以前読んだことがある」と思ったかわからない。照らし合わせてみると、それらは瓜(うり)二つといってよいほど酷似している。構成が同じなら、『東方見聞録』の引用箇所も同じであり、それに対する解説の内容も同じである。そればかりではない。他の資料や証言の、どれを、どこに、どのように引用するかというところまでそっくりなのである。

では、ハート本は岩村本の盗作なのか。いや、実態はまったく逆だと思われる。ハート本の旧版は、岩村本よりも九年も早い一九四二年に出ているのだ。ハート本の新版が岩村本を模したと考えられなくもないが、状況から判断するとその可能性は薄い。

それにしても、どうしてこのようなことが起きたのだろうか。訳者も指摘している通り、岩村本はハート本を「剽窃(ひょうせつ)」したものにはすぎない。それがほとんど半世紀にもわたって名著として流通していた。研究者は本当に気がつかなかったのだろうか？そして思うのだ。日本におけるハートのこの『ヴェネツィアの冒険家』は、なんと不運な書物だと。(沢木 1995)

岩村の翻訳論では、「そのまま訳する必要はない、訳者が理解したとおりを、訳者自身の言葉で語ればよい」という。しかも、同じ 1951 年に、岩村の名前でヘディン原作の本を『砂漠の探検』として出版している。この本も最後に書かれた「読者のために」がなければ、岩村の著作と認識される作りになっている。少なくとも表紙を見ても岩村の名前しかない。だから、このヘンリー・ハートを翻訳しただけの『マルコ・ポーロ』が岩村の名前で出版されても、ディレクターである岩村には許されると思ったのかもしれない。それならば、少なくとも一言「ヘンリーハートの著作を参考にした」と書くべきだった。それがなければ、いやあったとしても、これはまちがいなく剽窃である。

なお、岩村がヘンリーハートの著書を知っていたかどうかについては、知っていたことがあきらかにわかる証拠がある。実は、今井登志喜監修(1954)『総合世界歴史事典』(時事通信

社)に執筆した項目「東西交渉史」の参考文献に「Hart, Henry H. "Venetian Adventurer" 1947」(岩村 1954a:321)と記載されているのである。

上で引用した沢木耕太郎の書評に、「研究者は本当に気がつかなかったのだろうか？」とある。これについては、かなりの多くの人が気がついていたのではないかと思う。上記の佐口透も、1984年に『マルコ=ポーロ：東西を結んだ歴史の証人』(清水書院)を上梓しているが、当然知っていたであろう。しかし、誰も岩村忍の剽窃を指摘しなかったのである。

これに関連して、こんな話も漏れ聞こえる。岩村とは人文研で同僚だった先生からの話である。岩村忍の論文を査読することがあったが、そのとき人文研所長室に呼ばれて、「岩村さんは漢文が読めないのもまちがいがあると思うが、それは指摘しないで査読を通してほしい」と頼まれたのだという。漢文が読めない。モンゴル語も読めない。ロシア語も読めない。そうした岩村をみんな知っていた。京都大学教授であっても、学問に真摯に向かう学者ではないのだ。

以上、岩村忍をめぐる、いろいろと考察を加えてきた。上でみてきたことをまとめてみると、以下のようになろう。

岩村の本領は学問ではない。英語力を駆使した対米交渉にある。書簡にも、ロックフェラーのアメリカ研究夏期ゼミナルやアンソロポロジスト編集、日米知的交流委員会のターナー博士の来洛などが書かれているが、こうした相手は書齋にこもった博覧強記の学者には務まらない。岩村忍だからこそ可能なのだ。こうしたアメリカとの交渉力が認められ、フォード財団の資金援助によって京大東南アジア研究センターが設立されたときには、東南アジア研究とは無縁だった岩村が二代目所長に就任したことからもあきらかである³⁶。

岩村忍を糾弾するのが小論の目的ではない。あくまで岩村忍という人を知ってほしいだけである。

5. 『ジルニー文書』の評価

いろいろとあったが、とにもかくにも、1961年、『The Zirni Manuscript — A Persian-Mongolian Glossary and Grammar』は出版された。その評価はどうだったのか。

まず、村山七郎(1963)は『国語年鑑昭和37年版』の「言語学」の中で以下のように紹介している。

京都大学カラコルム・ヒンドウクシュ学術探検隊(1955年)がアフガニスタンで発見したモゴール語記録の影印とその研究が、岩村忍、長田夏樹、山崎忠の名で発表された(The Zirni manuscript, Kyoto, 1961)。これは世界の蒙古学にとって大きな収穫である。かつてこの記録は岩村忍によって中期蒙古語記録として伝えられたが、1958年夏、筆者はこの研究に序文

³⁶ 岩村の東南研での活躍は、猪木正道(1969)「岩村教授に感謝して」『東南アジア研究』6(4):1041を参照のこと。それによると、初代所長の奥田東が総長に任命されたために、急遽岩村が二代目所長に就任したという。

を寄せているポッペ教授（ワシントン大学）に同行して天理大学図書館で実物をみたとき、教授は数分間それを検討して、中期蒙古語の記録ではないと断定した。その序文の中でも、中期蒙古語にとって特徴的な語頭の h が消えていることから、中期蒙古語の記録でないと結論しモゴール語の資料であることを証明し、それにもかかわらずモゴール語資料が少ししか伝わっていない現在、きわめて重要な文献であると、述べている。この記録を苦心の末入手しその研究のためテヘランにとどまり病を得て他界した山崎忠、この困難な記録の解説、研究に最も力を注いだ長田夏樹、この記録を学界に提供する仕事をなしとげた岩村忍の功績は高く評価される。（村山 1963:20）

また、『長田夏樹先生追悼集』の中で、斎藤純男はジルニー文書を紹介している。その最後にこうまとめている。

ジルニー文書は、本書始めの Preliminary Remarks³⁷でポッペ [N. Poppe] が述べているように、モンゴル語学にとって非常に重要な文献のひとつである。それが発見されたこと、そしてこのような形で研究とファクシミリが公にされたことは学界に対する大きな貢献であった。（斎藤純男 2011）

これら二つの好意的な紹介はいずれも日本語で書かれたものである。ところが、斎藤の紹介の中に、以下の論文が参考文献に出てくる。

Homam, Sultan Shah (1972) A Brief Criticism on the So-called “Zirni Manuscript,” *Zentralasiatische Studien des Seminars für Sprach- und Kulturwissenschaft Zentralasiens der Universität Bonn* 6, Otto Harrassowitz, Wiesbaden.

Criticism というのだから、批判的なものであることは容易にわかる。そこで、早速コピーして読んでみた。

Homam(1972)は次の三点を指摘する。簡単にまとめると、

(1)この文書の製作日と場所について、『ジルニー文書』の 80 頁には 1251 年に作られたものとあるが、1351 年³⁸(今から、つまり 1972 年から 40 年前)である。また、いわゆる「ジルニー文書」は Būryābāf manuscript の一部であるから、ジルニーで発見された Būryābāf manuscript と呼ぶべきである。

(2)語彙と音声表記について、全部で 932 語あるにもかかわらず、それがすべて記録されていない。ペルシア語の詩韻律のために、音声表記も正しくない

³⁷ これは些細なことだが、『The Zirni Manuscript』の表紙には「Preliminay Remark」と r がぬけている。表紙ぐらゐはタイポをなくしてほしかったと思うのは筆者だけだろうか。

³⁸ イスラム暦の一つヒジュラ暦で、1351 年は西暦 1933 年に相当する。

(3)翻訳について、誤読、間違った翻訳、説明されていない単語がある。

とくに、(3)については具体例を挙げて、11頁にわたって指摘している。

この批判はかなり決定的である。これを受けて『ジルニー文書』の序文を書いたポッペも『ジルニー文書』がまったく価値のないものとして批判している。

Poppe (1975)はアフガニスタンのモゴール語については、ラムステッドを越えるものはないと指摘し、その例として注に以下を挙げている。

Iwamura, Shinobu and H. F. Schurmann "Notes on Mongolian Groups in Afghanistan", *Silver Jubilee Volume of the Zinbun-Kagaku-Kenkyusho, Kyoto University, Kyoto, 1954*, pp.480ff. When saying that little has been added to Ramstedt's observations on Moghol, of course, only the linguistic portions of the book mentioned was meant. The so-called Zirni Manuscript does not add much either, see Shinobu Iwamura with the collaboration of Natsuki Osada and Tadashi Yamasaki, etc. Kyoto, 1961. Numerous errors in translation and transcription have been pointed out by Sultan Shah Homam, see his "A Brief Criticism of the so-called Zirni Manscript", ZS 6(1972) pp. 561ff.(Poppe 1975:160)

ポッペの手のひら返しも素早いものである。岩村忍たちの研究はラムステッドの研究を越えていないし、いわゆる『ジルニー文書』も何の貢献もない(The so-called Zirni Manuscript does not add much)とまで言い切っている。Homamの批判を全面的に取り上げて、ポッペが自ら称賛した『ジルニー文書』を取るに足らないとばかりに、注で述べるにとどまっている。

実は、ヴァイヴァースの一連の研究が出て、この『ジルニー文書』の価値が下がってしまったことが大きい。この辺の経緯は栗林(1989)が詳しいので、以下に引用する。

1954年に、アフガニスタンで、モゴール族の集落の所在をつきとめたのは、岩村忍をはじめとする日本の京都大学探検隊である³⁹。探検隊は、翌1955年に、モゴール語を記録し、また、ペルシア語とモゴール語の対訳語彙集の2写本を入手した。写本とその研究は、*The Zirni Manuscript* (1961)として公刊されたが、口語の記録は、未公刊のままである。

1969～1971年には、西ドイツ、ボン大学の調査隊が、ヘラート州でモゴール族の調査を行い、口語を記録し、モゴール語の韻文や語彙集を発見した。その成果は、ヴァイヴァース⁴⁰

³⁹ すでにみてきたように、1954年は岩村忍の個人的な調査であって、京都大学探検隊とは関連しない。

⁴⁰ Michael Weiers(1936-)は1965年、博士論文 *Untersuchungen zu einer historischen Grammatik des präklassischen Mongolisch* でボン大学で博士号を取得し、1972年から2003年までボン大学で教鞭を執った。栗林が引用している文献は、Weiers (1972) *Die Sprache der Moghol der Provinz Herat in Afghanistan. (Sprachmaterial, Grammatik, Wortliste)*, Westdeutscher Verlag である。

(Weiers 1969, 1970, 1972a, 1975, 1977)、ハイシヒ⁴¹ (Heissig 1974) らによって公刊されている。とくにヴァイアース(1972a)は、短文 900 以上、単語約 1,140、音論、形態論、統語論を含み、モゴール語のもっとも詳しい概説となっている。

アフガニスタン本国では、ホーマン (S. Homan)⁴² が現地調査を行ない、モゴール語の韻文や物語を採集したと、学会で報告している。(栗林均 1989:448)

こうしてヴァイアースの研究が登場してからというもの、『ジルニー文書』は序文を書いたポッペにも見放され、今やだれも顧みることのない研究となってしまった。テープレコーダーに残された口語の研究までたどり着けなかったのが大きい。父は現地に行くこともなかったもので、口語の研究まではむずかしかったにちがいない。

6. おわりに

岩村の授業を聞いたことがある方⁴³からうかがったのだが、岩村は学期が終わるとゼミ生たちを楽友会館でフルコースのディナーをごちそうしてくれたのだそう。これを聞いたときに、父が岩村忍の悪口を言わないことの原因が何となくわかった気がした。

岩村忍が学問的にしっかりした人でないことは誰にもわかっていた。漢文が読めない。モンゴル語も読めない。ロシア語はやらない。それで元史・モンゴル史を名乗ることの恐ろしさを岩村自身も理解していた。この『ジルニー文書』についても、実質的には長田夏樹がすべてやっていることを多くの人たちが知っていた。だからこそ、岩村が滞印中、みんなが父に催促の書簡を寄せてきたのだ。いわば公然の秘密であった。すなわち、『ジルニー文書』が岩村の名前で出版されることは、父も了解していたことはまちがいない。あとは一緒に仕事をすうえで、気持ちよくやれるかどうかだ。

その点については、岩村は打ち合わせの際、父を京都まで呼んでは歓待したのだろう。自慢したり、偉そうにふるまうことは一切なく、宿泊するときなどはホテルを用意し、上等な酒をふるまい、楽しい時間を過ごすことができたからこそ、岩村忍の悪口は一切言わなかったのだろう。これはあくまでも推測に過ぎないが、酒をこよなく愛し明るく冗談をいう父を

41 ワルター・ハイシッヒ(1916-2005)はオーストリア出身のモンゴル学者である。父の手元に岩村忍からの 1962 年 8 月 8 日付電報が残されており、この日ハイシッヒと会っている。父はハイシッヒとはモンゴル語で会話し、自宅でいろんな文献をハイシッヒに見せ、ハイシッヒが Wunderbar を連呼したと嬉しそうに語っていたことを思い出す。うえで「1969～1971 年には、西ドイツ、ボン大学の調査隊が、ヘラート州でモゴール族の調査を行い」とあるが、アフガニスタンでの調査の可能性を京大学術隊から探るために来日していたのかもしれない。だからこそ、Zirni Manuscript の実際の著書である父に、ハイシッヒはわざわざ会いに来たのだろう。なお、以下の訳書がある。ワルター・ハイシッヒ著/田中克彦訳(1967)『モンゴルの歴史と文化』岩波文庫。

42 Homam のタイポである。

43 重松伸司追手門学院大学名誉教授からうかがった。重松さんは京大東洋史学科出身で、岩村忍の現役教授時代をご存じで貴重なお話を聞くことができた。

子供の時からみてきた筆者には、この推測があたっているように思う。

『ジルニー文書』をめぐる書簡の山を前に、何とかこれを生かすことはできないかと考えてきたが、小論を書き終えた今、肩の荷を下ろした気がする。

参考文献

- 朝日新聞(1961)「ゼルニ・マヌスクリプトを公刊」1961年7月16日付。
- 石濱純太郎(1934)『岩波講座 東洋思潮 満蒙言語の系統』岩波書店
- 猪木正道(1969)「岩村教授に感謝して」『東南アジア研究』6(4):1041。
- 岩村忍(1939)『十三世紀東西交渉史序説』三省堂。
- 岩村忍編(1940)『支那関係欧米名著略解』タイムス出版社。
- 岩村忍(1941a)『蒙古の欧洲遠征』三省堂。
- 岩村忍(1941b)「翻訳雑感」『中国文学』79:454-459。
- 岩村忍(1943)『蒙古史雑考』白林書房
- 岩村忍(1948)『マルコ・ポーロの研究 上巻』筑摩書房。
- 岩村忍(1950)『日本人はどれだけの事をしてきたか』(日本少国民文庫 15)新潮社。
- 岩村忍(1951a)『マルコ・ポーロ：西洋と東洋を結んだ最初の人』岩波新書。
- 岩村忍(1951b)『砂漠の探検』(中学生全集 36)筑摩書房。
- 岩村忍(1954a)「東西交渉史」今井登志喜監修『綜合世界歴史事典』時事通信社。
- 岩村忍(1954b)「雑録：アフガニスタンのモゴール族」『東洋史研究』13(3):234。
- 岩村忍(1954c)「アフガニスタンだより」『民族学研究』18(3):280
- 岩村忍(1955)『アフガニスタン紀行』朝日新聞社。
- 岩村忍編(1955)『アサヒ写真ブック 12 アフガニスタン』朝日新聞社。
- 岩村忍(1956)「モゴール族を訪ねて」木原均編『砂漠と氷河の探検』朝日新聞社。
- 岩村忍(1962)「モゴール族」『アジア歴史事典』9:55。平凡社。
- 岩村忍(1963)『元朝秘史：チンギス=ハン実録』中公新書。
- 岩村忍(1966)「解題 中央アジア探検記」『現代世界ノンフィクション全集 1』筑摩書房。
- 岩村忍(1968)『モンゴル社会経済史の研究』京都大学人文科学研究所。
- 梅棹忠夫(1956)『モゴール族探検記』岩波新書。
- 木原均編(1956)『砂漠と氷河の探検』(朝日新聞)
- 栗林均(1989)「モゴール語」『言語学大辞典』三省堂。447-451頁。
- 斎藤純男(2011)「The Zirni Manuscript: A Persian-Mongolian Glossary and Grammar」
- 長田夏樹先生追悼集刊行会編『長田夏樹先生追悼集』好文出版。133-134頁。
- 佐口透(1984)『マルコ=ポーロ：東西を結んだ歴史の証人』清水書院。
- 佐口透(1996)「中国ムスリム研究の回顧と展望—民族研究所とその遺産—」『内陸アジア史研究』11:1-16
- 沢木耕太郎(1995)「書評：ヘンリー・ハート、幸田礼雅訳(1994)『ヴェネツィアの冒険家：

マルコ・ポーロ伝』『朝日新聞』1995年2月5日付。

白鳥庫吉(1938)「序」岩村忍『十三世紀東西交渉史序説』三省堂。

日本映画新社監修(1956)『カラコルム：カラコルム・ヒンズークシ探検の記録 中央アジア探検記録』平凡出版。

ヘンリー・ハート、幸田礼雅訳(1994)『ヴェネツィアの冒険家：マルコ・ポーロ伝』新評論。

スウェン・ヘディン、岩村忍訳(1938)『中央亜細亜探検記』(富山房百科文庫) 富山房。

村山七郎(1963)「言語学」国立国語研究所編『国語年鑑昭和37年版』秀英出版。18-22頁。

(欧文文献)

Homam, Sultan Shah (1972) A Brief Criticism on the So-called "Zirni Manuscript," *Zentralasiatische Studien des Seminars für Sprach- und Kulturwissenschaft Zentralasiens der Universität Bonn* 6, Otto Harrassowitz, Wiesbaden.

Iwamura, Sh. and H. F. Schurmann (1954) Notes on Mongolian groups in Afghanistan, *Silver Jubilee Volume of the Zinbun-Kagaku-Kenkyusho*, Kyoto University. pp.478-

Iwamura, Shinobu with the collaboration of Natsuki Osada and Tadashi Yamasaki (1961) *The Zirni Manuscript: A Persian-Mongolian Glossary and Grammar*, Kyoto University

Ligeti (1968) 「A Propos du "Manuscrit de Zirni"」『田村博士頌寿東洋史論叢』田村博士退官事業会。17-44頁。

Poppe, Nicholas (1975) 「Altaic linguistics-an overview」東京言語研究所編『言語の科学』6:130-186。

Schurmann (1962) *The Mongols of Afghanistan: An Ethnography of the Moghòls and Related Peoples of Afghanistan*, Mouton

付録1. 長田夏樹宛岩村忍書簡

1954 (昭和29)年 1通

(1). 29-10-05

拝啓 御高著抜刷大変有益に拝読しました。・・出歩いていましたので御礼おしくて恐縮です。アフガニスタンで蒙古語を話すモグール人に会いました。結果はこんどの研究所二十五年紀要に発表するつもりです。先はお礼迄、いずれ拝眉の上 頓首

十月四日

1956 (昭和31)年 7通

(1). 31-01-01

賀正

拝眉の節モゴール語についての御高見承りたく存じます。

元旦

(2). 31-07-14

拝復 先日はわざ／＼御枉駕恐縮でした。あの写真は不完全です。今、完全なのをつくっています。山崎君の遺稿も整理できました。私は夏中アメリカ・ゼミナルのため京都を離れられません。午前中はゼミナル（同志社）午後は研究室 or 家におります。お暇の時またいらっしやいませんか。

不一

七月十四日

(3). 31-07-30 封書

拝復 御手紙大変有益に拝読。小生この暑中に不拘、毎日ロックフェラーのアメリカ研究夏期ゼミナルにて鐘詰にされ、うだっています。ウズベックという名は比較的近世のもので、Uzbek Khan 以後のものでしょう。ウズベックのナイマン⁴⁴はそれ以前からの名で、確かに乃蛮の名残です。しかしタイマニがナイマンから出たという事も考えられなくはありません。ウズベックについてはヤリングの好著があります。目下写真屋が多忙にて仲々焼付をこしらえてくれませんが、催促しております。八月十二日以後はアメリカ・ゼミナルも終り暇になりますから、一度拝眉したいと存じます。御都合よい節御知らせ下さいませんか。

御加餐をいのります。

不一

七月卅日

岩村忍

長田夏樹学兄

(4). 31-08-22 速達

冠省 先日は態々お出下さって有難うございました。モゴル文献ゼルニ文書写真一揃別便にて送りました。小生明日から二九まで上京しますので、その間右お調べの上、九月早々でも京都にもう一度御来駕願えればお待ちしております。要用のみ。

頓首

八月二二日

(5). 31-09-01 速達

拝復 昨日帰洛しました。三日お待ちしております。

拝眉の上

草々

九月一日

(6). 31-11-02

拝復 御健康どうですか。小生このところ俗用にてとても忙しく失礼しました。三日から七日までは小生、天理の人類学大会に行きます。七日から十五、六日までも頗る会や来訪者

⁴⁴ ナイマンについては、以下のウィキペディアを参照。The Naiman (Mongolian: Н а й м а н, Naiman, "eight"; Chinese: 乃蠻; Kazakh: Н а й м а н, Naiman; Uzbek: Nayman) were a medieval tribe originating in the territory of modern Western Mongolia (possibly during the time of the Uyghur Khaganate), and are one of the tribes of modern Mongols and in the middle juz of the Kazakh nation.

が多く、二七日頃上京、二十四日頃帰洛します。それで今月末あたり、貴兄に京都に来て戴き、ゆっくり御相談したく存じます。

なお天理の大会で五日夜、山崎君の追悼会を東京側京都側合同にてやります。御出席になりませんか。

草々

十一月二日

(7). 31-12-19 速達

拝啓お変わりありませんか。小生十月来おそろしく多忙のところ、この程漸く一段落しました。また礼の二種の写真も漸く出来上りましたし、参考文献もあり、またその他御相談いたし度く、お暇を見て御来駕願えないでしょうか。小生年末までずっと在洛です。御都合のよい日、御一報さればお待ちしております。

拝眉の上 要用のみ

草々

十二月十七日

1957 (昭和 32) 年 12 通

(1). 32-02-13 現金書留

拝啓 お変わりありませんか。些少ですが、度々御足願った電車賃として金五千円同封いたします。

今後の研究御相談いたし度く近く御出で下さいませんか。御出で下さる日を至急御連絡願います。水曜以外でしたら結構です。

拝眉の上

頓首

二月十四日

岩村 忍

長田夏樹様

(2). 32-03-07 速達封書

拝啓 先日は失礼。結局、レコードはやめてテープにすることに決め、新式のテープ・レコーダーを買いました。

東京へは今月中旬ごろでは如何？小生は十五日夜から二〇日頃まで上京します。旅費をお渡したいので、十一日か十二日に御苦勞ながら京都に来て戴けませんか。印を持参して下さい。大兄は小生と同行の必要はありません。三月中に行ってくださいれば結構です。

臨川書店から買ったスタイガスの辞典を御出の時、御持参下さい。やはり今年度中に購入登録しないと代金支拂できないそうです。但し直ちに手続を取ってくれるそうです。御出での日、御一報ください。

拝眉の上

不一

三月七日

岩村 忍

長田夏樹兄

(3). 32-03-17

冠省 先日はわざ／＼御足労でした。小生恐しく多忙にて今までついにお約束の写真複写間に合いませんでした。今朝上京、二二日に帰洛の上、早速やります。帰洛しましたら東京での様子御連絡します。

取急ぎ右まで

頓首

三月十七日朝

(4). 32-03-30

拝啓 帰洛がおくれ、それから千客万来にて御連絡おくれました。服部君⁴⁵には大兄御上京の由とよろしくと云っておきましたので、四月中には御上京願います。お帰りの上は至急小生に御連絡下さい。小生四月中旬に上京の予定です。

要用のみ

頓首

(5). 32-04-13

拝復 御帰りの由、ご苦勞様でした。小生このところ日米知的交流委員会⁴⁶のターナー博士の来洛で忙しいのですが、来週中頃からは暇になります。いずれその中に拝眉、ゆっくりお話伺いたいと存じます。

敬具

四月十三日

(6). 32-05-13

拝復 御無沙汰しました。小生もそのうちに拝眉したいと存じていました。今週でしたら木、金、土とも午後一時以後でしたら研究室におります。

拝顔の上

不一

五月十三日

追伸 レゲテの欠頁つくらせておきます。

(7). 32-05-18 速達

拝復 火曜日お待ちしております。正午前にお出下さいませんか。ご一緒に食事をしたいと思えます。要用のみ

頓首

五月十八日

(8). 32-06-21

拝復 上京中でしたので御返事おそくなりました。トルコマン字引の件、研究費が到着次第処理します。

⁴⁵ 言語学者で東大教授を務め文化勲章を受章した服部四郎のことと思われる。

⁴⁶ ロックフェラー三世が設立をすすめたもので、「戦前、新渡戸稲造を事務局長に国際連盟内に組織された国際知的協力委員会に触発され、範をとった日米知的交流委員会が設立されました。この組織は二つの委員会からなり、一つは、コロンビア大学の東アジア研究所に、もう一つは東京に置かれ、東京の委員会は東京大学教授で、アメリカ研究の泰斗、高木八尺を委員長、松本を常任幹事に活動を始めました。このプログラムによって、「第一級のアメリカ知識人」が日本を訪問、また、日本の知識人がアメリカに派遣されることになりました」と以下のサイトにある。<https://www.i-house.or.jp/history/>

七月十日ごろから休暇に入りますから、モゴール文書にかゝってはどうぞでしょう。とにかく休暇に入ったら、御原稿御持参の上、御来駕願えませんか。御加餐をいのります。 頓首

六月二一日

(9). 32-07-23

拝復 お子様御病気の由、御見舞申上ます。実は小生、例のアメリカ・セミナーとアンソロポロジスト編集のため、ごた／＼して御連絡できませんでした。その後、MS に関する用件もあり、是非近々拝眉いたし度く、今週金曜（二六日）か、来週月火（二九、三〇日）なら一日あけておきます。御都合のよい日にお出下さいませ。拝眉の上、いろ／＼お話し度く存じています。要用のみ 頓首

(10). 32-11-21

冠省 昨日岡崎精郎⁴⁷君に会いました。モンゴル文書は口頭の発表なら中間報告一向差支えありません。

今年度研究費による参考書を買う御相談いたしたく、最近一度御上洛下さいませんか。小生は水曜午後、金曜、土曜午前以外でしたらあいていますが、最も都合なのは火曜か木曜です。

御加餐をいのります。

頓首

十一月二一日

(11). 32-12-11

冠省 チャガタイ語の字引、京大にありません。どこかにあったら借りて下されば、写真は直ぐとります。その他、必要な本は買って、写真をとってもよいので、お知らせ下さい。研究費は近く支出できる見込みです。なお、近く学兄の今年度の旅費をお送りします。前に買ったトルコマン字引の領収書送って下さい。代金を拂うよう手続します。休暇になったら一度御出で願えませんか。いろ／＼お打合せしたいことができました。（出版費が明年度で取れることになりましたから）。拝眉の上 不一

(12). 32-12-18

拝復 お元気の由慶賀申上ます。土曜日お待ちしております。拝眉の上 不一

十八日

1958（昭和33）年 15通

(1). 33-01-09 封書（消印がないため年については推測）

冠省 御原稿拝見しました。この要領で、ただ総訳だけを省略すればよいのではないでしょうか。クンドル文書は目下拝見中です。

大兄御要求の本は京大にはないようですが、そちらで本だけ都合できませんか。写真は直ぐこちらでとれますが、ポッペのパスパ文字考とコータン字典は注文しました。

出版費要求の手続は四、五月頃にやりたいそうです。

⁴⁷ 岡崎精郎は京大東洋史を卒業後、阪大助手を務め、追手門学院大学に長く務めていた。

要用のみ

不一

一月九日

岩村 忍

長田夏樹様

(2). 33-04-07

拝復 御元気ですか。小生もこのところ大変多忙で失礼していました。来週は八日から十日までは割合ひまです。特に九日、十日なら好都合ですが、この両日のうち御都合のよい日に御来駕願えませんか。色々お話ししたい件があります。

いづれ拝眉の上

頓首

四月六日

ポッペのハグSPA文字考が到着しています

(3). 33-05-25

冠省

近頃如何ですか。小生このところ恐しく多忙(アメリカ・セミナーと近東旅行準備のため)で閉口していますが、二十九日(木曜)だけあいているので、御光来願いないでしょうか。小生九月早々出発のため今後の調査の件でぜひ大兄と御相談したい事があります。来月早々上京するので、それ以前に何とかお会いしたいと思います。要用のみ 五月二五日 不一

(4). 33-06-21 (横書き)

冠省 英訳は大分やりましたが、語彙の M.D.対応がわからなくなったのがかなりあります。文法の方は割合に楽です。近日中にお送りしますから、至急御訂正下さい。

transcription の清書は当方で一部作成中です。未完の部分なるべく早く御作成下さいませんか。

transliteration の進捗は如何ですか。

大学は7月5日で終業ですからその後、何日でもあいています(7月20日からはアメリカ・セミナー)。

御加餐を祈ります。

頓首

6月21日

(5). 33-07-24

酷暑御恙ありませんか。先日お送りした原稿御落手になりましたか。

小生八月四日以後でしたら暇になりますから、そのころ御原稿御持参でお出で願えませんか。また泊ってゆかれたら如何?御出の日を予め御一報下さい。

頓首

七月廿四日

八月初旬にはポッペが京都にくるはずです。

(6). 33-07-29 速達

拝復 ポッペ氏が滞洛中です。四日にいらしゃったら一緒に話をしましょう。お待ちしております

います。

拝眉の上

頓首

七月二九日

追伸 ボ氏は一週間ほど滞洛の予定です。四日は午前中にお出でになれば、午後にお会い
できるようアポイントしておきます

(7). 33-08-13

冠省 あれから風邪がわるくなり、閉口でした。トランスレーションは漸く終わりました。
本日夜行に上京、十八、九日に帰洛します。それ以後御都合のよい時、御来駕下さいませ
んか。

御加餐を祈ります。

不一

八月十三日

(8). 33-08-28 速達

冠省 東京滞在が延びて御連絡おそくなりました。トランスレーションはできています(但
し 27 ; 56-28 ; 2 まで原稿が欠けています。捜して下さい)。

拝眉の上御相談したく、御光来ねがえませんか。八月三十一日(日曜)以外でしたら、当分在洛
しています。

お返事お願いします。要用のみ

頓首

八月廿八日

(9). 33-08-31

拝復 できたら九月四、五日頃、御来洛ねがいませんか。或は間に合ったら、二日でも三
日でも結構です。十七日京都出発廿は羽田発の予定です。

拝眉の上

不一

八月卅日

(10). 33-09-05

冠省 別便で原稿一括お送りしました。念のため御覧下さい。翻訳の 16, 16 | 19 9a ご注
意願います。十三日(土)か、十五日(月)に原稿まとめて御上洛できませんか。

取急ぎ要用のみ

不一

九月五日

(11). 33-09-11

拝復 お出下さるのは十六日で結構です。一日あけておきます。

ポッペのムカデイマト⁴⁸とフィンノウグリアだけ、こんど御持参下さい。他は当分そのま
まにお使い下さい。

拝眉の上

不一

九月十一日

(12). 33-09-12 (印刷ハガキ)

⁴⁸ Poppe (1938) Mongol'skij slovar' Mukaddimat al-adab: Ukazateli

平素のご無沙汰をお詫び申し上げます。

こんどデリー大学の Indian School of International Studies, Sapru House, Barakhamba Road, New Delhi-1, India の客員教授及びフォード財団研究員としてインド及び近東地方に当分の間、旅行、滞在することになり、九月下旬羽田を出発いたします。

右ご挨拶まで。

一九五八年九月十日

岩村 忍

(13). 33-09-21

冠省

原稿接手しました。

右要用のみ

不一

九月廿一日

(14). 1958-10-25 国際郵便 絵はがき

原稿の進行状況いかが。小生の方も着々進めています。到着早々講義をやらされて閉口しています。このアリガート大学（イスラム）で秘史の英訳⁴⁹が出ています。クリーヴスの第一巻⁵⁰も出ました。ジュワイニ⁵¹の訳も見ました。ドイツのチベット学の元老シューバート⁵²がきております。原稿の件、時々御連絡ねがいます。

ニュー・デリー

十月廿一日

岩村 忍

(15). 1958-12-15 航空書簡

拝啓 その後如何ですか。十二月というのはここでは日中は汗をかくぐらいです。十一月にはパキスタン、アフガニスタンに行ってきました。明年は四月中旬から八月中旬まで再びアフガン、イランで暮らすつもりです。

原稿の英訳できたので研究所の安部さん宛に送りました。写真、その他の原稿も一切安部さんのところにあります。印刷についても安部さんに御世話を頼んであります。安部さんから連絡ありましたら、原稿を取りに相談に一度京都に行ってください。そうすれば出版費用の

⁴⁹ Wei, Kwei Sun (1957) *The Secret History of the Mongol Dynasty: (Yuan-Chao-Pi-Shi 元朝秘史)*, Aligarh Muslim University を指す。

⁵⁰ Cleaves, Francis Woodman, *The Secret History of the Mongols, for the First Time Done into English out of the Original Tongue and Provided with an Exegetical Commentary, I (Translation)*. Cambridge MA: Harvard University Press, 1982 [but completed in 1956; no more published] この 1956 年版を指すのだろう。しかし、1982 年まで出版はされていない。

⁵¹ ジュワイニとは、コトバンクによると「イランのホラーサーン州ジュワイン地方の名家出身の歴史家、財務官僚。(中略)〈ホラズム帝国史〉〈イスマール派教団史〉〈モンゴル帝国史〉の3部からなる《世界征服者の歴史 Ta' rikh-e Jahān-gushāy》を著した」とある。この『世界征服者の歴史』の訳のことを言っているのであろう。

⁵² ライプツィヒのカール・マルクス大学のチベット学の大家 Johannes Schubert (1896-1976) のことであらう。

件もわかると思います。翻訳のため原稿を熟読しましたが大変立派と思います。出版されたら世界のモンゴリストは大喜びでしょう。訳文はよく見て誤訳を正して下さい。私はあとは校正を見るだけでよいかと思います。語彙の方はどうですか。完成しましたか。その後の様子お知らせ下さい。

ご健勝を祈ります。

頓首

十二月十五日

岩村 忍

長田夏樹様

1959（昭和34）年 4通

(1). 1959-01-02 航空書簡

拝復 新年おめでとうございます。十二月二十九日付御手紙拝見しました。英訳の疑問の点及び追加の箇所は、その部分だけ手紙で云ってきて下さい。インドの郵便は必ずしも信用ができないので（時には着かないことがあります）原稿全部を何回も送ったり、送り返したりするのは危険です。

小生は四月中旬から八月初旬はアフガニスタンとイラン東部の山の中で暮らすので、その間御連絡は不可能ですから、なにかあったら、四月以前に御連絡下さい。原稿も四月までに完成して、夏以前に印刷所にまわさないと三十四年度出版に間に合わないと思いますから、そのおつもりでお願い申します。

取急ぎ右御返事まで

不一

一月二日

岩村 忍

(2). 1959-02-28 航空書簡

長田夏樹様

安部さんがなくなったのがっかりしています。人文科研ではモゴール語研究はやはり今年度中に出版の意向です。原稿はいかがですか。私はこの四月末から七月末まで旅行に出るので、その前はグロサリー、インデックス等の進捗状態御連絡下さい。

安部さんがなくなられたので、出版の件は今後平岡武夫さんに依頼しますから、大兄を一度平岡さんと研究所の事務長を訪問してお打合せして下さい。

御健康を祈ります。

二月廿七日

岩村 忍

(3). 1959-04-10 航空書簡

拝啓お変わりありませんか。こちらは既に連日三七、八度の暑さで、五月に入ると四六度になるそうです。小生は今月二〇日から二五日の間にデリー出発、五月早々にはカーブルに到着の予定です。デリーに帰るのは七月下旬と思っています。

ゼルニ・テキストの語彙はどうなりましたか。本年度中に出版しないとならないので、至急お願いします。五月上旬から七月中旬までの小生のアドレスは Professor Iwamura, c/o Japanese Embassy, Kabul, Afghanistan です。御連絡をお願いします。

今年は七月末デリーに帰り、来年二月まで滞在、三月デリー発、近東旅行し、七月には日本に帰る予定でいます。

御健康を祈ります。

不一

四月十日

岩村忍

長田学兄

(4). 1959-09-30

長田夏樹様

その後いかがですか。小生この夏は3カ月例の如くアフガニスタンで調査、こんどは Tatar 族を山の中で発見しました。場所は Hindukush の北部 Turkistan 寄りのところです。

今年度 Moyoli 研究出版費 70 万円をとれたことは御承知の通りです。Poppe から我々の Moyoli text の出版を大いに期待している、早く見たいと云ってきています。Ligeti からも同じように最近云ってきました。よろしくお願いします。校正は一度だけ小生に見せて下さい。小生は 1960 年 3 月末日までデリー滞在、4 月早々アフガニスタンを経由、イラン、アラビア、トルコを旅行、7 月下旬か 8 月早々帰国予定です。

小生の研究室の助手勝藤猛⁵³君を Paštu 語研究のためアフガニスタンに留学させることに決定しました。この夏、小生カーブルに滞在中アフガン政府に交渉して承知させた次第です。Paštu は日本では始めてなので、勝藤君に期待しています。ところで上記の Tatar の発見もあり、そのうち貴兄も一度アフガニスタンに行ってみませんか。その気がおありでしたら、小生多少御盡力できるかと思えます。

出版の件について御知らせをお願いします。

御加餐をいのります。

岩村 忍

1960 (昭和 35) 年 15 通

(1). 35-05-11 電報

コウセイシキユウタノム」イワ

(2). 35-07-13 速達

拝啓

その後お変わりありませんか。

⁵³ ウィキペディアによると、「勝藤 猛 (かつふじ たけし、1931 年 -) は、日本の東洋史学者、ペルシア語学者、大阪外国語大学名誉教授」とある。岩村忍とは共著『大蒙古帝国』(人物往来社) 1965 がある。

数日前に帰りました。原稿の件でなるべく早くお目にかかりたいので、御都合つき次第ご面倒でも一度御上洛願えませんか。

小生はこんどの日曜を除きいつでも結構です。

七月十三日

(3). 35-08-04 封書(消印がないので年は推測)

拝復 高林君⁵⁴のタイプ同封します。かなりミス・タイプがありますから、御注意下さい。

イタリックはすべて文字の下に赤鉛筆でアンダー・ラインを引いて下さい。

transcription もモンゴル語はすべてイタリックにしたいと思います。〈 〉はとって下さい。イタリックのルビは——a でよいのではありませんか。必要なら a の斜体をつくらせたらどうです。

目下、アラビック、特殊表音文字の造字をやらせています。でき上ったら見本印刷をさせて、お送りしますから、足りない分や不適當なものの修正を指定して下さい。

原稿の割付は小生がやります。

序文(プレフェース)と序論(イントロダクション)はできています。

ポッペへもその中に校正を送ると連絡しておきました。

序論の割付はすみしました。目下、ヴォキャブラリーをやっています。

トランスレーション、トランスクリプションはなるべく早くやって書留で送って下さい。

印刷所のほうの準備ができれば、御連絡しますから、もう一度御足労下さい。

要用のみ

不一

八月四日

岩村 忍

長田兄

(4). 35-08-17

お変わりありませんか。

割付けは先日終了しましたが、グロサリーには疑問の箇所がかなりありますから、貴兄の方の原稿修正でき上り次第、また京都にお出下さいませんか。中外印刷の方も近似中に活字鑄造の経過を報告してくるはずです。小生この二〇日から二四日まで不在になりますが、それ以後でしたら、いつでも結構です。御出の日を御一報下さいませんか。

拝眉の上

不一

八月十六日

(5). 35-09-03 速達

前畧

(一) uruhi, slope (XVI-1a)は前後が食物ゆえ意味が合いません。このことばは Sanscrit, urīhi; Pashtu, u'rijzey の「米」とちがいますか?尤も米は XVI-6a に tuturyan があります

⁵⁴ 藤枝晃の書簡に出てくる高林藤樹のことだと思われる。1960年に『西南アジア研究』に「バブ教とバハイ教」を発表している。糺書房という出版社を経営していたようだ。

が。ご一考願います。

(二) auraq (VIII-8b)はラシードの ayuraq, 元史の「奥魯」にちがいありません。

(三) XXVII-8b . . . they both mean come like amad, which in Moyoli は何か脱落があります。お調べねがいます。

要用のみ

八月三日

岩村 忍

(6). 35-09-08 速達

前畧 今日内外印刷がきて、原稿を渡してくれとってきました。鑄造活字をこしらえている間、一応ゲタばきで組みたいそうです。この原稿を組める工人はすくないので手があいている間に組んでおくのだそうです。それで御手許で修正中の都合、至急お送り下さいませんか。そのうちにまた御足労願って最終の印刷打合せしたいと思っています。

九月八日

(7). 35-09-18

拝復 御手紙とアラビア文字表拝受。二三日(金曜)に御来駕下されば好都合です。中外印刷も呼んでおきます。小生二五日から今月一ぱいは外国のお客数名がくるので忙しくなります。

ロシア字表は早速取りよせておきます。

不一

九月十八日

(8). 35-09-24

拝復 二十九日(木曜)をあけておきますが、同日で御都合いかゞです。よかつたら、印刷屋も寄っておきます。

九月二六日

(9). 35-10-30

冠省お変わりありませんか

校正近日中に出ますから早速お送りします。出来るだけ早くやって下さい。ポッペさんから返事あり(ヨーロッパに行っていたそうです)。校正刷とテキストの写真をおくつてくれれば直ぐ序文を書いてくれるそうです。第三校ぐらいを送ってやりたいと思っています。

御加餐をいのります。

二十八日

頓首

(10). 日付なし(順番から推測)

お元気ですか

本文の校正は近く一度に出すそうです。

岩村

長田兄

(11). 日付なし(順番から推測)

初校二通同封します。なるべく早くご返送お願いします。

一應、初校が済んだころ京都へお出で願って印刷全体にわたる検討を御一緒にしたいと考

えています。

要用のみ

岩村 忍

長田兄

(12). 35-11-16 封書(封筒がなく消印が不明。末尾に十六日とあるので、この日か。)

長田兄

一. アラビア文字の活字表を同封します。このうち印刷に必要な文字を赤で囲んで至急ご返送下さい。早速鑄字にかゝらせませす。

二. 原稿拝受。残り至急お送り下さい。

三. 語彙はもう印刷所に渡しました。索引も一緒に。校正で多少なおしてもよいでしょう。

四. スプラの関係で、活字を大きくするという件は、印刷所の話では14ポでは、あまりに大き過ぎないかとのことです。序、本文は後で組みますから、いづれ貴兄御上洛の節、御相談します。

要用のみ

草々

十六日

岩村 忍

(13). 35-11-26 速達

冠省 お変わりありませんか。

校正至急お送りねがいます。ポッペ氏の序文のため校正刷おそくも一月中には送ってやらないとなりますので、急ぐ次第。

アラビア文字は字母ができ、目下鑄字中。コロタイプは来週からとりかゝります。

右要用のみ

休暇になったら一度御上洛願えませんか。

十一月二十六日

(14). 35-12-15 封書 (封筒がないため、年は推測)

冠省 これで初校すみしました。年末で職工を遊ばせておくわけにゆかないので、校正至急ねがいます。

印刷費は予算七十万円のところ、見積は百三十万円かかるので、目下差額捻出に奔走中です。

テキストはコロタイプに決定、目下作製中です。

早く初校おわらないとポッペの序文に困ります。この点ご配慮下さい。アラビア文字の見本同封しました。植字はヒドイようです。

近いうちに御上洛お願いします。時日御知らせ下さい。

取急ぎ要用のみ

頓首

十二月十五日

岩村 忍

長田兄

(15). 35-12-20 速達

拝復

二三日お待ちしています。研究室におります。

十二月二〇日

1961 (昭和 36) 年 14 通

(1). 36-01-17

冠省

校正 q まで本日接手しました。そのあとは出ていましたかしら。ながくなるので失念しました。出ていたら急いでやって下さい。

要件のみ

頓首

一月十七日

(2). 36-02-23 封書 (ただし消印がないため年は推測)

拝啓 お元気ですか。ようやくアラビア文字を組むようになりました。校正至急御らんの上御返送下さい。御多忙中とは思いますが、再校が出揃った頃、一度御上洛ねがえませんか。出版形式その他につき御相談したいことがあるのです。

いづれ拝眉の上

頓首

二月二三日

岩村 忍

長田夏樹様

(3). 36-02-27 封書速達

拝啓おハガキ本日頂戴しました。小生昨冬来身体の調子あまり面白からず——たぶん胃潰瘍と肝臓——ご連絡できませんでした。

大兄の御健康はいかが？本日、外大へ電話したのですが、もう休暇とかで、お話しできないで残念でした。

実はゼルニ・テキストの件、前年度 (一昨年) から引き続き内外印刷にやらしているのですが、内外から前渡金支拂の要求があったので、研究所事務局の責任で一部今年始めに支拂いました。それで若し会計検査 (四、五月ころ) までに出版されていないと、事務長と会計係長の進退にまで影響するので (昭和三五年にも予算を使えなかったことで既に責任になっています) 小生も気をもんでいます。小生自身のことなら、何の心配もしていないのですが、累が何も知らぬ事務局にまで及んでは申しわけがありません。

とりあえず初校残り至急ねがいませんか。

大兄が非常にお忙しいようでしたら、再校までやって下されば、その後は小生がやります。とにかく右のように今年度は責任問題にまで発展しそうなので、何とかお願いします。

右本部局から念のためとって強い申入れがあったのです。

何なら小生、大兄のお宅へ伺います。御都合至急お知らせ下さい。要件のみ取急ぎ右まで。

不一

二月二七日

岩村 忍

長田学兄

(4). 36-03-13 電報

アスキテトマツタライカガ 』イワムラ

(5). 36-03-18

拝復 先日は御苦勞様でした。ポッペさんへは昨日写真と校正を送り、至急序文書いてくれるよう手紙を出しました。できるだけ四月中旬までに送ってくれるよう、無理とは思ったが、依頼しました。序文語数は六千字以内としてやったので、まだ数頁の余裕がありますから、マローヴ⁵⁵の論文により二、三頁から五頁ぐらいのものお書き下さって結構です。しかし至急御願います。

頓

首

三月一八日

(6). 36-03-30(a) 速達

前略活字の新鑄ができて目下はめこみ中です。校正三、四日中にできます。秘史動詞表はどうになりましたか。

会計検査は五月初旬になりました。それまでに何とかしたいと印刷所を督励しています。

要件のみ

不一

三月二九日

(7). 36-03-30 (b) 速達

冠省 いまポッペさんの序文つきました。早く書いてくれたものです。早速印刷にまわします。内容はざっと読んだだけですが、貴兄と一論争あるべきかと思われる点を含んでいそうです。

不取右お知せまで。

不一

三月二九日後五時

(8). 36-04-07 封書 (消印がないため年は推測)

急ぐ必要上、小生先に校正しました。

先日の「秘史語尾表」と共に至急御らんの上御返送下さい。

終校は京都にいらしゃって宿りがけで見えては如何。

取急ぎ要件のみ

四月七日

岩村 忍

長田兄

⁵⁵ Sergey Yefimovich Malov (Сергей Ефимович Малов; 1880-1957)のことか。論文とあるが以下か。У й г у р с к и е наречия Синьцзяна: Тексты, пер., слов. М., 1961

(9). 36-04-11

冠省 語尾表接手しました。印刷所ストライキをやりかけていたのが、漸くおさまった
そうで、直ちにスピード・アップする由です。 不一

四月十一日

(10). 36-05-11 封書 (消印がないため年は推測)

同封の見本はローマンにつき、イタリックなら造字のため印刷見本が必要です。至急送っ
て下さい。書物なら紙片を挿んでおいて下さい。取急ぎ右まで。

(記号) はいかが？

五月十一日

二十三日までに何冊かは製本させるため内外を鞭撻しています。とにかく校正至急ねがい
ます。

(11). 日付けないがない封書 (順番から推察)

会計検査は三十日にきました。その結果六月三十日までに完成という条件でようやく始末
できましたが、この期日は絶対再延長できないことになりました。

校正至急お願いします。

(12). 36-06-08 封書 (消印がないため年は推測)

前便で書き忘れましたが、**glossary** の柱に **arabic** はいつ入れますか。こちらにある校正刷
のほうを見ているのですが、まだかなり **misprint** があるようです。小生気がついたものは仁兄の
校正を受けとったら対校してみます。

柱のアラビックの校正と本の体裁の最終時決定にもう一度だけ御上洛ねがわぬとならない
かと思っています。

とにかく取急ぎ校正おねがいます。

頓首

六月八日

岩村生

長田仁兄

(13). 36-06-09 電報

一二ヒキテモラエヌカ」イワ

(14). 36-06-09 封書 (消印がないため年は推測)

冠省 今朝電報しました。昨日午後、文部省から大学本部経理部に電話がかかりました。
それによると会計検査院の講評で京大の公費支出に手続上不適当なものがある旨指摘され、
その中にはゼルニ・テキスト出版が含まれていたそうで、大学本部でも狼狽し、研究所事務
室が叱られました。それだけならよいのですが、検査院と文部省に誠意(?)を示すために
印刷所を督励し、今月十九日に検査院と文部省との連絡会議までに一部だけでも製本して文
部省に届けよという指令がありました。右は事務関係のことで我々には何でもないのですが、
小生としても本部が責任を問われるのをほっておくわけにはゆきません。右の状況につき、
いままでお送りした校正を月曜までに必ずお願いします。最後の校正は京都に来てやっても

raitai to omoimasu. yuuyou no mi

六月九日 9am

岩村 忍

長田兄

モゴール語関係書簡

1958 (昭和 33) 年

(1). 33-12-24 速達 安部健夫からのハガキ

前略

昨二十二日在インド岩村氏よりモゴール語原稿エアメールにて届きました。御手渡しかたがた出版の件について御相談いたしたいと思いますので御多用中恐縮ながら、当地までお出で願えれば幸甚です。(二十五日以前は二十八日まで毎日出勤、午前 10 時頃一午後 3, 4 時頃まで在所予定です)

1959 (昭和 34) 年

(1). 34-02-14 速達 梅棹忠夫からのハガキ

オサダ ナツキ サマ

ナガラク ゴブサタ イタシテ オリマス。オカワリ ゴザイマセンカ。

サテ 1955 ネン ノ カラコルム〜ヒンズークシ タンケンタイ ノ ホウコクショ ノ コト デワ イロイロ オセワニ ナツテ イマスガ、サイキン ヨウヤク シュッパンノ グタイテキナ ケイカクニ トリカカリマシタ。ゴショウチノ トウリ キョウト〜ダイガク セイブツシ〜ケンキュウカイ デ デンコウヲ トリマトメ、シュッパン スル コトニ ナツテ オリマス。

ツキマシテワ モゴールゴ ニ カンスル ブブン ノ コトデ、ゼヒ アナタノ ゴイケンヲ ウカガイ、ウチアワセヲ イタシタイト ゾンジテ オリマス。ワザワザ キョウト マデ オコシヲ ネガワネバ ナラズ、タイヘン モウシワケ ナイト ゾンジマスガ、ゼヒ カイチョウノ アシダ ジョウジ キョウジュ ニ アツテ イタダキタイノ デス。コチラノ カツテナ ツゴウヲ モウセバ、アシダ キョウジュワ ライシュウノ カヨウビ (17ニチ) ガ ヨイ ト ユウ コト デスガ、アナタノ ゴツゴウワ イカガ デスカ。カツテ ナガラ シキュウ ゴレンラクヲ イタダケレバ アリガタイト ゾンジマス。

ナニトゾ ヨロシク。

(2). 34-02-16 安部健夫からの封書

長田夏樹様

その後ご無沙汰しています。

さっそくながらカラコルム・ヒンドウクシ=探検隊研究報告の件です。この程国家予算の通過と落伍が内定されましたが、われわれの分は残念ながら落伍しました。あとは所長、事務長を動かし、本学会計課に働きかけて、学内措置としてその費用を捻出してもらう以外に、他に適当な手段もない模様。事実、理学部芦田教授らはすでにその方向にふみきり、ある程度まで成算をもっている様子です。

については御依頼中の **Glossary, Index** 新しい見積り書をとる必要上、できるだけ早急に完成していただきたいと存じます。お忙しいところを大変恐縮ですが、事態が事態ですので宜しく御頼み申し上げます。

3月上旬まではいかがでしょうか。

1959年2月16日

安部健夫

(3). 消印なし。手渡されたものか。印刷ハガキ

京都大学人文科学研究所教授安部健夫の研究所葬のさいには、御多用中にもかかわらず、ご参列下さいましてあつく御礼申し上げます。

昭和三十四年二月二十二日

京都大学人文科学研究所長 塚本善隆
安部てい
安部勲夫
安部玖美子

(4). 34-02-26 梅棹忠夫からのハガキ

センジツワ トウイ トコロヲ ワザワザ オイデ クダサイマシテ、アリガトウ ゴザイマシタ。

アノ スグ アトデ、トツゼンニ、マッタク トツゼンニ、アベ タケオ キョウジュガ ナクナラレタ ノデ、ナニモ カモ ヒックリ カエツテ シマイマシタ。アト ドウ ユウ コトニ スルカ、マダ ナンニモ キマツテ オリマセンガ、モウ スコシ オチツイタラ、ナントカ スル コトニ ナル デシヨウ。ソノ トキ ニワ イズレ ゴホウコク モウシ アゲマス。

カシコ

(5). 34-07-22 京都大学人文科学研究所 藤原茂男からの往復ハガキ

拝啓 炎暑の候と相成りました。其后如何でしょうか。

今回は岩村教授の出版物のことについて種々御世話になり恐れ入ります。

さて出版費の予算が決定しましたので、原稿のことについて御相談致したく存じますので、恐縮ですが、至急御来所願ひ度く折返し日時を御一報下さるようお願い致します。

敬具

(6). 34-07-25 京都大学理学部植物学教室 北村四郎からの封書

謹啓

暑さ厳しいところ御気遣いかがでございましょうか。御迷惑なことを御願いたしますので恐縮に存じます。

カラコルム・ヒンズークシ探検隊報告のことです。本年度は岩村さんの論文と私の論文が出版されることになっており、この二つの出版費は六月に文部省で承認されました。七月の始めに京大に通知があり私の分は九十五万円、岩村さんのは金額は未定とのことでした。

私の方は京都の日寫で目下組ませており第一稿がでており、これは十二月迄に配布する見通しがつきました。

岩村さんの論文は見積がむつかしく従って具体的に印刷所と交渉し正確なことが明とならばたゞちに金額を文部省に申し出て、金額（私の場合は申請通り）を決定してもらって印刷していただいたらと存じます。

先日広島大学印刷株式会社増田訓清という人が来られて、その後同封の様な手紙を受け取り、又十日程前にも来て話して行かれました。印刷は欧文のものは可成り立派にやっています。

尚この広島の件は万一の御参考の資料として申し上げますので、不要の場合は御放念下さいませ。

私は岩村の指示にもとずき貴殿に一切を御願してなんとかして本年度中に出版したいものと存じます。

大阪に適当なところがあれば一番望ましく存じますが、なければ広島なり東京なりで印刷所をきめていただきたく存じます。

芦田教授からも長田さんに御願してくれとのこと、暑中まことに心苦しいことですが、よろしく御願申し上げます。

七月二十五日

北村四郎

長田夏樹様

(7). 34-08-10 藤枝晃からのハガキ

拝復 貴信拝見しました。

尊稿を原稿の状態のうちに拝読することは大変光栄です。腰もだいぶよくなって来ましたから、二人でおいでの節に原稿をお渡し下さい。其後東京にも二三あたりでしたが、アラビア活字がないので係は閉口してゐる模様です。

八日

(8). 34-08-23 藤枝晃からのハガキ

尊稿が事務室の金庫の中にあることを知りましたので、昨日ざっと拝見しました。此方

へおいでの折にゆっくりお話ししたいと存じます。

廿四日（月）及廿八日（金）一卅一日（月）の間は毎日、厄介な予定があつて、ゆっくり時間がとれないと思ひますから、その外の日にして下さる方が結構です。 二十二日

(9). 34-09-02 藤枝晃からの封書

長田兄 この日は1~4時、敦煌変文購読、5日（土）は大阪行、6日（日）クラス会といふ予定です。大阪外大のアラビック活字の話、だんだん心細くなって来ました。

（以下はガリ版印刷）

敦煌文献研究連絡委員会報告会

時：34年9月14日（金曜）

午後4時~5時

所：京都北白川 京大人文学研究所

報告：

- 1) 委員会の組織経過報告
- 2) スタイン文書目録経過報告（分類目録の編纂をほぼ完了）
- 3) 分類目録出版計画
- 4) 影印シリーズ出版計画
- 5) 今年度研究費

上記の通り関西部会第3回報告会を開きます。御多用中且つ暑中御迷惑ながら御都合がつけば御出席下さい

関西部会委員長 塚本善隆

(10). 34-09-12 藤枝晃からのハガキ

今日、高槻にある大阪外大専属の印刷所を検分して来ました。とにかく、こゝで一應印刷ができないことはないと判りましたので、恐らくこゝが引受けのことになるでせう。

従つて本文についての貴兄との話し合ひをできるだけ早く済ませて方が好いと思ひます。何とか御都合をつけて下さい。そして毎度勝手を申しますが、月曜は定例ゼミナールにつき、この日だけお外し下さい。

(11). 34-09-13 藤枝晃からのハガキ

昨日ハガキを差上げたのと入れ違ひに貴信只今拝受しました。それでは十五日（火）午前お待ち申上げてゐます。

十二日朝

藤枝晃

勝藤君アフガニスタンに行くことになった様子

(12). 34-09-26 藤枝晃からのハガキ

腰の故障がまた起こりました。

従つて火曜は、午前は醫者へ行きますから、勝手ながら午後においで下さる様お計らい下さい。

九月廿六日

(13). 34-10-13 藤枝晃からのハガキ

先日はむさ苦しい所まで御来駕恐入りました。どうやら出勤できる様になりましたので、この仕事にもとりかゝります。ところで、先日、重大な用件一つ忘れしました。普通の ABC 以外にどれだけの特殊文字を使ふか、一覧表を作ってくれとの印刷所の注文です。大変御手数とは存じますが、はじめにそれだけの母型を作らないと仕事できませんから宜しく御願います。

(14). 34-11-17 電報

シキユウオイデ コウ」ジ ンブ ンカイツ カ

(15). 34-11-22 藤枝晃からの封書

長田兄

先日は遠路御来訪恐入りました。

その節の件、貝塚さんと話し合いました。

1) この出版の責任者は「委員会」で従って研究所に於ける当事者は貝塚さん自身になるこのことです。すべては、これが根本になって決まりますから、水曜日に細目については貝塚さんとお話し合ひ下さい。

2) 旅費などの問題は、貴下に“協力”を要請する公文書が外大に参り、學長が OK を與へれば、それによって、その協力についての費用は研究所の予算から直接出ることになるのださうです。

3) 昨日、Glossar の見本組の手配をしました。

4) 先日申上げたかどうか、思出せませんが、この Glossar の前につけるべき文、表、などは貴兄の手で御用意願います。

以上要用のみ

藤枝晃

(16). 小さい紙に走り書きのみ。手渡ししか

本日参上しましたが、学生大会で学長らにも会えませんでした。事務には公文が来ていたので趣旨を説明しました。一週立った時に、一週一回なり京都に来られるという正式の公文で市の人事課より兼任の承認を取るよう もう一度出す必要ありとっていました。学長、事務と御打合せの上御返事下さい。

十一月廿五日

貝塚茂樹

長田兄

(17). 34-12-08 封書

長田夏樹様

京都大学人文科学研究所

藤原 茂男

岩村教授の原稿については度々御足労をわづらわせ恐れいります。

さて過般 貝塚教授が貴学へ御伺いした節御不在でしたので御手渡しすることができませんでしたが、同封のものは神戸ー京都間の旅費及び謝礼として御査収下さるよう御願い致します。

(18). 34-12-19 藤枝晃からの封書

長田兄

先日より高林藤樹君がずっと仕事をすゝめてくれてゐます。

本日、グロサリーの見本組ができて来ましたから同封します。御覧の通りにて、カタチの決定まではまだ数回の修正を必要とするでせうが、第一次修正のために御注文いろいろ伺い度く、御苦勞ながら一度おいで下さい。(勝手ながら月曜は小生のゼミあり。ほかの日に願います)

その節活字母型作成の必要上、先日お送り頂いた字母表に見える時ののってゐる本をお持ち下さい。それを写真にとります(ペン書きだけでは字の太い細いが判らないとのことです)

十二月十九日

藤枝晃

1960 (昭和 35) 年

(1). 35-02-04 藤枝晃からのハガキ

昨日は遠路御苦勞さまでした。ところで、Glossary にペルシア原語を差かへることは 必要のないこととせうか。御考へおき下さい。

二月三日

(2). 35-02-09 藤枝晃からのハガキ

貴信拝見しました。

十八ー二十日 楽友会館の予約を致しました。

二月八日